

たけ しき 敷 遺 跡  
竹 敷 遺 跡

第2次発掘調査



## 例 言

1. 本書は永岡地区小規模住宅地区改良事業に伴い実施した「竹敷遺跡」の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. この調査は筑紫野市教育委員会が、筑紫野市の事務委任を受けて実施した。
3. 調査対象地は、大字永岡845番地の1（竹敷遺跡第2次調査a地点／408㎡）。大字永岡909番地の1・7・8・9・10の一部（竹敷遺跡第2次調査b地点／296㎡）、の合計704㎡である。
4. 発掘調査は筑紫野市教育委員会教育部社会教育課文化財担当主事奥村俊久（現ふるさと館担当主査）が担当した。
5. 現地での調査にかかる実測および写真撮影は奥村俊久が行うとともに空中写真測量を東亜建設技術株式会社に委託した。
6. 出土遺物の実測は有限会社遺跡整備計画に委託した。
7. 製図は有限会社文化財テクノアシストに委託した。
8. 出土遺物の写真撮影はフォトハウス Oka に委託した。
9. 遺構、遺物の色調の記載はすべて農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修の新版標準土色帳による。
10. 遺構番号は頭にSを冠し1から通し番号を付け、単体で完結しないと考えられるピット等の遺構は頭にPを冠し同じく1から番号を付した。
11. 報告に当たっては遺構の性格付けを行い、竪穴式住居跡をS I、土壇をS K、溝をS Dの略号を与え、その後に現場で付した番号をそのままに付した。ピット等については遺構番号のままとした。
12. 本書の執筆、編集は奥村俊久が行った。

# 目 次

I 調査に至る経過 .....	1
II 位置と環境 .....	1
III 竹敷遺跡の調査 .....	7
A. II a 地区の内容 (第 3 図 図版 2) .....	7
1. 土壌 .....	7
2. 溝 .....	8
B. II b 地区の内容 (第 6 図 図版 2) .....	8
1. 住居跡 .....	8
2. 土壌 .....	20
3. 不明遺構 .....	23
4. 溝 .....	24
5. ピット出土の遺物 .....	25
IV まとめ .....	26
A. II a 区について .....	26
B. II b 区について .....	26
1. 竪穴式住居跡について .....	26
2. その他の遺構について .....	27
3. P97 出土遺物について .....	27

## I 調査に至る経過

平成11年11月22日付けで、筑紫野市から筑紫野市教育委員会に永岡地区小規模住宅地区改良事業に伴い文化財の所在について照会があった。しかし、事業地の大半は既存の住宅地となっており、全体的な遺跡範囲の確認や内容の把握が困難な状況であった。このため、試掘・確認調査が実施可能な箇所については当初行うものの、事業地の大部分は事業の進捗にあわせ随時行うこととした。平成12年12月25日付けで、筑紫野市教育委員会と筑紫野市は事業地内の文化財の取り扱いについて覚書を締結するとともに、同月26日付で事業地内の文化財調査事務委任協定書を締結した。事業地内には竹敷遺跡と常松遺跡が所在し、事業工程との関係から、竹敷遺跡から発掘調査を開始した。竹敷遺跡は平成13年1月9日から開始し、同月16日付で文化財保護法98条の2第1項に基づく報告を行い、平成13年3月1日付けで事業の進捗に伴う確認調査の結果、調査対象面積が縮小したため、協定を変更し、平成13年3月30日に発掘調査を終了した。

## II 位置と環境

筑紫野市は、福岡市と久留米市のほぼ中間に位置する。東に三群山塊、西に背振山塊が迫り、その間に二日市低地帯と呼ばれる狭長な平野部がある。この平野部は北西に福岡平野を、南東に筑紫平野を望み、市の北部は博多湾へ注ぐ御笠川水系の鷺田川流域、その外の地域は有明海に注ぐ筑後川水系の宝満川流域となる。宝満川は三郡山に源を発し、吉木、阿志岐の平野を潤し、永岡付近で九千部山に源を発する山口川と合流し、久留米市で筑後川に注ぎ込む。宝満川流域には数多くの遺跡が所在する。中流域で、その中核をなすのは三国丘陵と呼ばれる八つ手状に延びる丘陵に所在する大遺跡群である。この地域は筑紫野市と小郡市で大規模な区画整理事業が行われ、その事前調査で数々の埋蔵文化財が発見された。筑紫野市側の隈・西小田地区遺跡群では約52haが調査され、弥生時代から古墳時代を中心に膨大な数の遺構が検出された。弥生時代の代表的なものとしては第7地点から中細型銅剣23本が出土し、一括埋納されたものと考えられている。また、第13地点の23号甕棺墓では右腕に21個、左腕に20個のゴホウラ製貝輪を装着した成人男性人骨に、重圏文双銘帯式昭明鏡と鉄戈、鉄剣が副葬されていた。第3地点109号甕棺墓でも熟年男性の人骨と共にゴホウラ製貝輪8個と細型銅剣が出土している。<sup>註1</sup>隈・西小田地区遺跡群の北には以来尺遺跡があり、12,259㎡が発掘調査され、弥生時代の遺構としては、<sup>註2</sup>竪穴式住居跡が700軒を超え、掘立柱建物98棟、通路等が検出されている。これら三国丘陵の遺跡群の北側には、やや広い谷を挟み阿蘇4火砕流堆積物による台地状地形が広がるが、この台地も本来は、谷と丘陵が入組む形状を呈していた。この丘陵部の北側は、二日市低地帯の南端部で山口川がこの台地を回り込むように流れている。前述の南側のやや広い谷部は、この川が阿蘇4火砕流堆積以前に流れていた跡と考えられており、この丘陵部は現在では独立した形状を呈す。この丘陵上にも永岡遺跡をはじめ、竹敷遺跡、常松遺跡など多くの遺跡が所在する。

永岡遺跡は4次に渡る発掘調査が実施され、遺跡の主体を成す弥生時代中期の墳墓群はほぼ完掘された。土壌で区画された帯状の墓域内に成人棺が2列に埋置され、小児棺は成人棺の墓壇上に付属す



- |             |                |          |            |
|-------------|----------------|----------|------------|
| 1. 大宰府跡     | 2. 大曲り遺跡       | 3. 野黒板遺跡 | 4. 柚の木遺跡   |
| 5～9. 御笠地区遺跡 | 10. イカリノ上遺跡    | 11. 峠山遺跡 | 12. 天山宮崎遺跡 |
| 13. 永岡岸元遺跡  | 14. 竹敷遺跡       | 15. 永岡遺跡 | 16. 常松遺跡   |
| 17. 仮塚南遺跡   | 18. 岡田遺跡       | 19. 本谷遺跡 | 20. 筑紫倉良遺跡 |
| 21. 以来尺遺跡   | 22. 隈・西小田地区遺跡群 |          |            |

第1図 竹敷遺跡周辺遺跡分布図 (縮尺 1/25,000)



るように埋葬されるものが多く、合計、甕棺墓154基、木棺墓20基、土壙墓10基が検出された。<sup>註3</sup>また、常松遺跡は永岡遺跡、竹敷遺跡の南側の広範囲に広がる遺跡である。昭和33年に宅地造成に伴い発掘調査が行われ、竪穴式住居跡、袋状貯蔵穴、甕棺墓等の墳墓、さらに溝が検出されており、それらを検討した結果、弥生時代の前期後半～後期前半の生活空間があった事が窺われる。<sup>註4</sup>平成8年には共同住宅建設に伴い発掘調査が実施され、常松遺跡と重複して存在する諸田仮塚遺跡の北側の丘陵端部が確認された。また、諸田仮塚遺跡で検出された1号、2号墳はいずれも削平されているが、1号墳は直径20mの円墳で、横穴式石室であったと考えられている。周溝からは初期須恵器や円筒埴輪、朝顔形埴輪のほか、家形、鳥形、馬形、靱形など形象埴輪が出土している。2号墳は横穴式石室をもつ、直径11m程の円墳と考えられている。周溝からは小田富士雄氏編年III b期の須恵器が出土しているが、その中でも子持装飾器台は特筆すべきものである。また馬を埋葬した土壙墓が4基検出され、特に4号墓からは馬歯とともに鉄製環状鏡板付轡が出土している。<sup>註5</sup>諸田仮塚遺跡のある丘陵南側裾部には仮塚南遺跡があり、小田富士雄氏の須恵器編年III b期の集落が調査されている。<sup>註6</sup>

竹敷遺跡は、この丘陵の北端にあり、二日市低地帯、山口川を挟んで三郡山塊から延びる丘陵の南端を望む。永岡遺跡は開析された小さな谷を挟み東側に位置する。竹敷遺跡は平成2年に倉庫の建設に伴い発掘調査を実施し、竪穴状遺構や溝状遺構等が検出された。<sup>註7</sup>この調査を1次調査とし、今回の調査を2次調査とする。さらに、今回の事業に伴い埋蔵文化財が確認された箇所は大字永岡845番4と大字永岡909番1外の2箇所、2次調査を表すIIを冠し、調査の順に前者をII a区、後者をII b区とする。

## 註

- 註1 「隈・西小田地区遺跡群」筑紫野市文化財調査報告書第38集 1993 筑紫野市教育委員会  
 註2 「以来尺遺跡II」筑紫野市文化財調査報告書第39集 1994 筑紫野市教育委員会  
 「以来尺遺跡I」筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集 1997 福岡県教育委員会  
 「以来尺遺跡II」筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集 1998 福岡県教育委員会  
 「以来尺遺跡III」筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告第7集 1999 福岡県教育委員会  
 註3 「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集」 1970 福岡県教育委員会  
 「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第4集(図版編)」 1976 福岡県教育委員会  
 「福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第5集(本文編)」 1977 福岡県教育委員会  
 「永岡遺跡」筑紫野市文化財調査報告書第6集 1981 筑紫野市教育委員会  
 「永岡遺跡II」筑紫野市文化財調査報告書第26集 1990 筑紫野市教育委員会  
 「永岡遺跡 永岡遺跡第4次発掘調査」筑紫野市文化財調査報告書第73集 2002 筑紫野市教育委員会  
 「永岡遺跡」吉田高穂 筑紫野市史 資料編(上)考古資料 2001 筑紫野市  
 註4 「福岡県筑紫郡筑紫野町常松遺跡調査報告書」別府大学文学部史学科考古学研究報告書1 1970 賀川光夫他  
 「常松遺跡」武末純一 筑紫野市史 資料編(上)考古資料 2001 筑紫野市  
 註5 「諸田仮塚遺跡」筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第5集 1998 福岡県教育委員会  
 註6 「仮塚南遺跡」一般国道3号筑紫野バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第3集 1995 福岡県教育委員会  
 註7 「竹敷遺跡」筑紫野市文化財調査報告書第30集 1991 筑紫野市教育委員会



第3図 竹敷遺跡 第1次調査・第2次調査IIb区遺構配置図 (縮尺 1/200)

### Ⅲ 竹敷遺跡の調査

#### A. Ⅱ a 地区の内容 (第3図 図版2)

全体的に削平が著しく、さらに調査前には民家も建っていたため、その基礎やゴミ穴等も多く、遺構の残りは悪い。主な遺構としては土壇3基、溝2条、ピット78個を検出した。出土遺物は遺構検出時に弥生土器の細片が僅かに出土したのみで、遺構に伴うものはなかった。

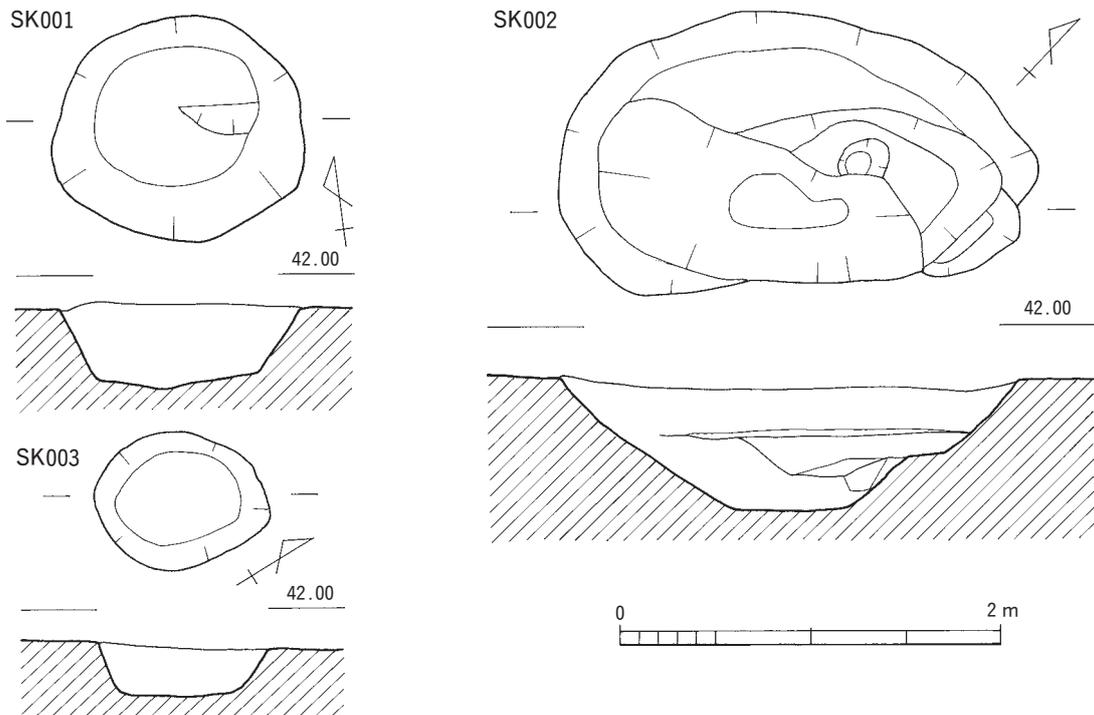
#### 1. 土壇

##### (1) SK001 (第4図)

調査区の西端で検出した径120~130cmの円形プランを呈す土壇である。深さは35~45cmで、壁体は直線的に下る。床面は径72~90cmでほぼ平坦であるが、東側にあまい段を有す。

##### (2) SK002 (第4図)

SK001の北側で検出した。250~145cmの長楕円形プランを呈す土壇である。遺構検出面から20~30cm下の北西寄りに段を有し、さらに15~20cm下の北東寄りにも段を有す。床面は土壇の南東寄りにあり、60×30cm程の不定形ながら平坦な床面である。



第4図 SK001~003実測図 (縮尺 1/40)

### (3) SK003 (第4図)

SK002のSK001側に隣接して検出された。径95～75cmを測る円形プランの小型の土壙である。深さは30～20cm程で、壁体は直線的に下り、径65～50cmを測る平坦な床面にいたる。

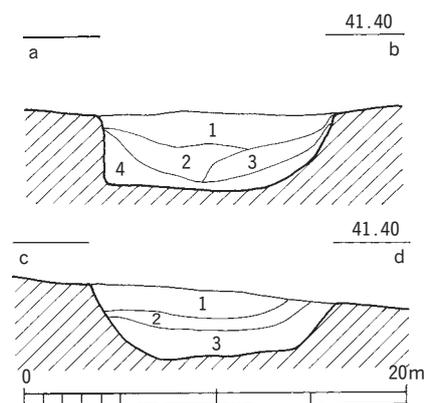
## 2. 溝

### (1) SD004

調査区の北西隅で、長さ5.9mを検出した。主軸はS-38°-Eにとり、直線的に延びる。幅は40～30cmを測る。床面には凹凸があり、深さは30～10cm程で残りが悪い。

### (2) SD005 (第5図 図版3)

調査区の西寄りを南北に走る溝で、長さ11mを検出した。幅は70cm程で、S-9°-EからS-9°-Wにかけて緩やかに弧を描いて延びる。深さは北側で約20cmを測り、徐々に浅くなりながら南端は遺構検出面に続く。



a-b 断面

1. にぶい黄褐色粘質土層 (10YR5/4)
2. 暗褐色粘質土層 (7.5YR3/3)
3. 暗灰色粘質土層 (2.5YR4/2)
4. 橙色粘質土層 (7.5YR6/5)

d-c 断面

1. 明黄褐色粘質土層 (10YR7/6)
2. 灰黄褐色粘質土層 (10YR4/2)
3. にぶい黄褐色粘質土層 (10YR5/4)

第5図 SD005断面図 (縮尺 1/40)

## B. II b 地区の内容 (第6図 図版2)

調査区は丘陵部の縁と考えられ、東側は急な傾斜で落ちるか、段状に削平される形状を呈していた。このため遺構が残存するのは調査区中央部から西側に限られる。主な遺構は竪穴式住居跡3棟、土壙5基、溝3条を検出した。

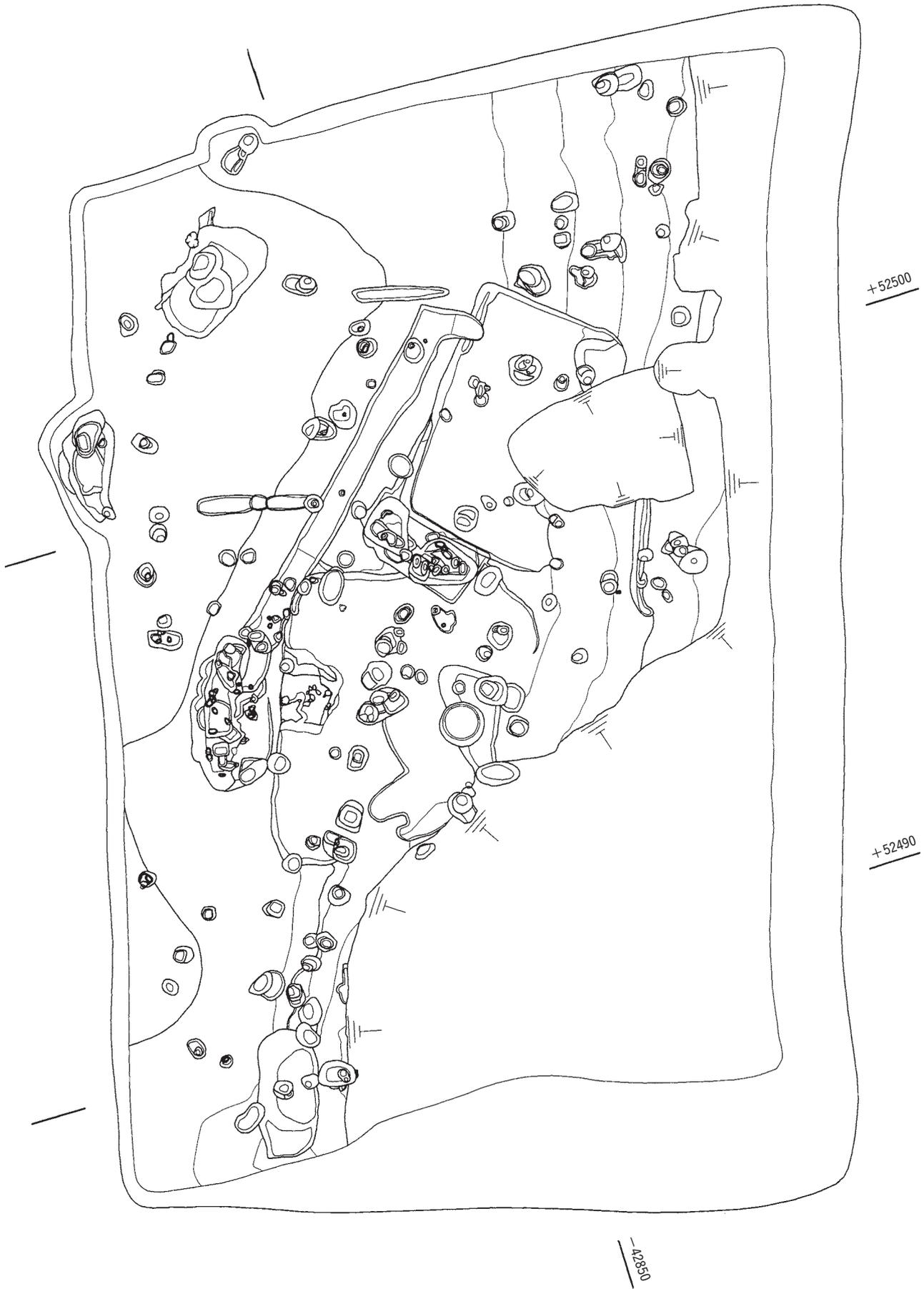
### 1. 住居跡

#### (1) SI005 (第8図 図版4)

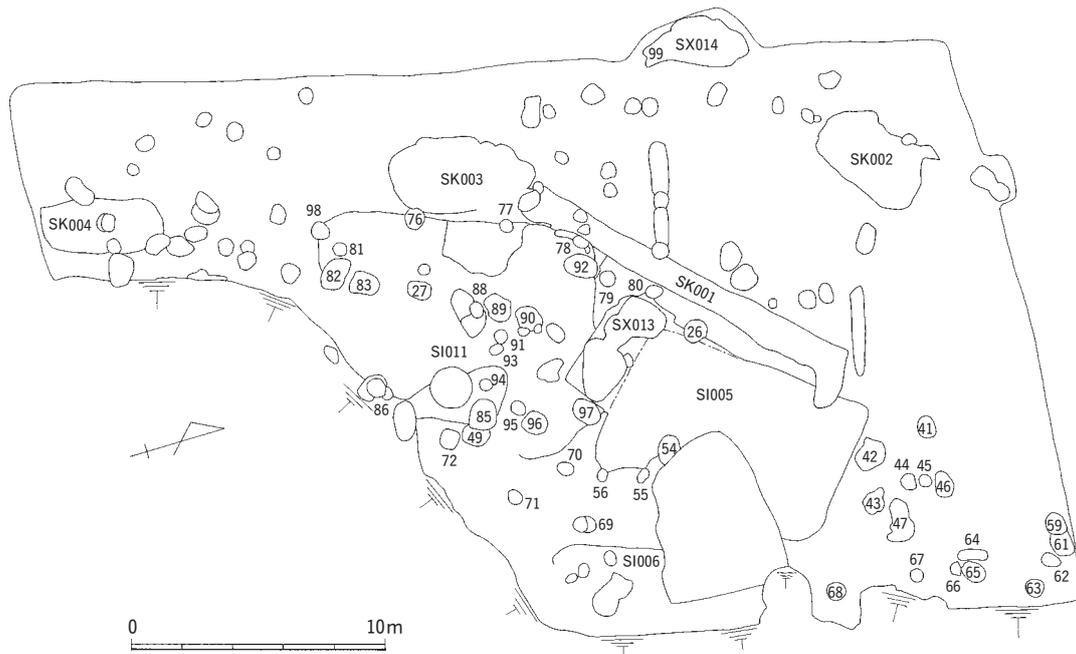
方形プランを呈す竪穴式住居跡である。西側の壁体は失われているが、残存する北東-南西の壁体は長さ450cm測り、北東隅に壁溝が残る。残存する壁高は最も良く残っているところで40cm程である。主柱穴は住居跡床面中央から東側にかけて大きな攪乱土壌があり明確にできなかったが、4本の可能性も考え床面西部分を精査したが柱穴は確認されなかった。

### 出土遺物 (第9図)

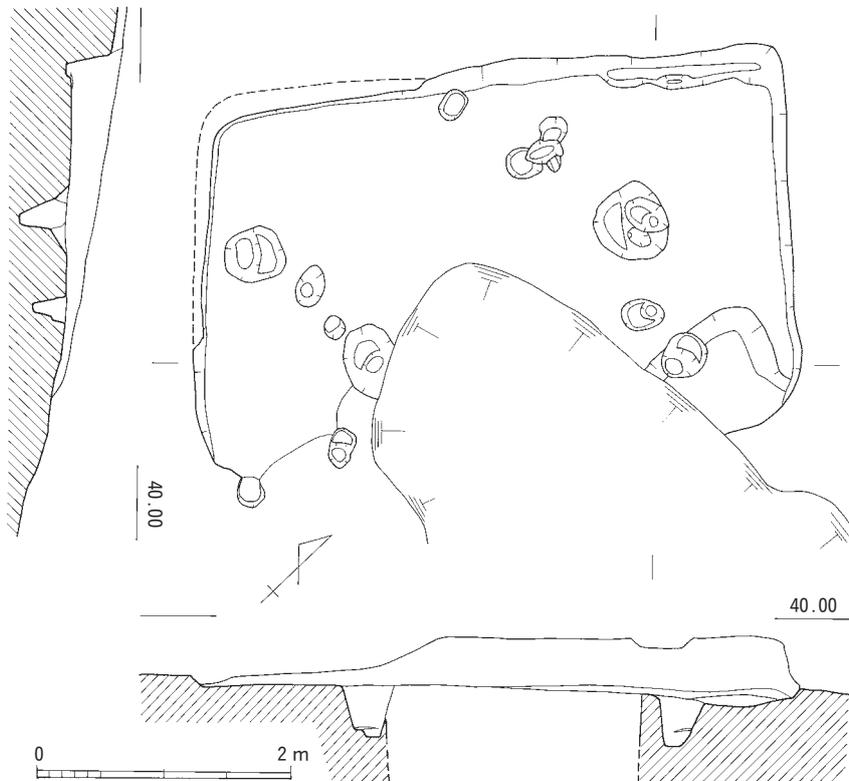
1は口縁部内面にかえりを持つ須恵器の坏蓋で、1/4足らずが残存する。残存高2.9cm、口径を敢えて復元すれば14.2cmとなる。天井部から体部にかけて緩やかなカーブを描き、口唇部はやや外方に引き出され端部は丸くおさまる。天井部は口唇部から3.5cmの位置から右回りに回転ヘラ削りが行わ



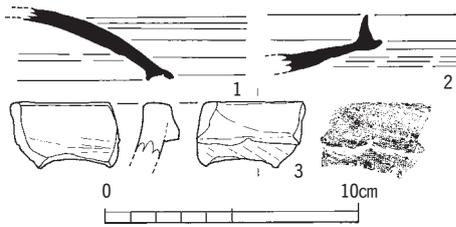
第6図 IIb区遺構配置図(縮尺 1/100)



第7図 SI005実測図 (縮尺 1/60)



第8図 SI005実測図 (縮尺 1/60)

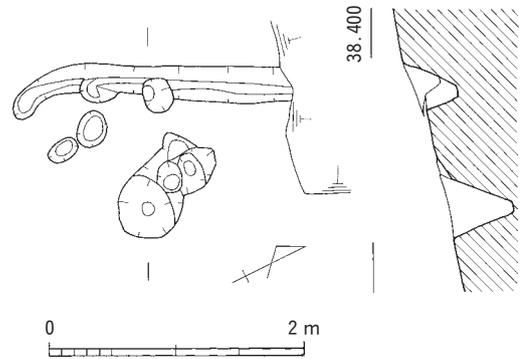


第9図 SI005出土遺物実測図(縮尺 1/3)

れ、天井部中央には撮みが貼付されるものと思われる。胎土は細砂粒を若干含み、中には4mm大の砂粒も見られる。色調は内外面ともに灰色(10Y6/1)を呈し、焼成は良好である。2は須恵器坏身の4~5cm角程の小片である。立ち上りはやや内傾するものの直立し、高さ1cmを測る。受け部は僅かに横方向に引き出され、体部は浅いと思われる。胎土には砂粒が見られるが、焼成は堅密である。色調は内外面ともに灰色(内面 N5/ : 外面 5Y5/1)を呈すが、焼成時に灰を被り斑な色調を呈す。小片のため明確にしえなかったが、全体にもう少し内傾し、体部が深くなる可能性もある。3は土師器の口縁部ではあるが、器種は不明である。口唇部は上から粘土帯を被せるように貼付し肥厚させ、外から粗く押しナデている。その直下は僅かであるが横方向に近い右傾斜の刷毛目が観察される。内面は横方向のヘラ削りが施され、口唇部はヨコナデされる。胎土は最大3mm大の砂粒が見られ、色調は内外面ともに明褐色(7.5YR5/6)を呈す。

(2) SI006 (第10図 図版4)

調査区東側の斜面部で検出した。壁体、床面ともにほとんど残っておらず、南西隅の壁溝のみが検出された。壁溝の内側からピットも検出されたが、住居跡に伴うものかどうかは不明である。



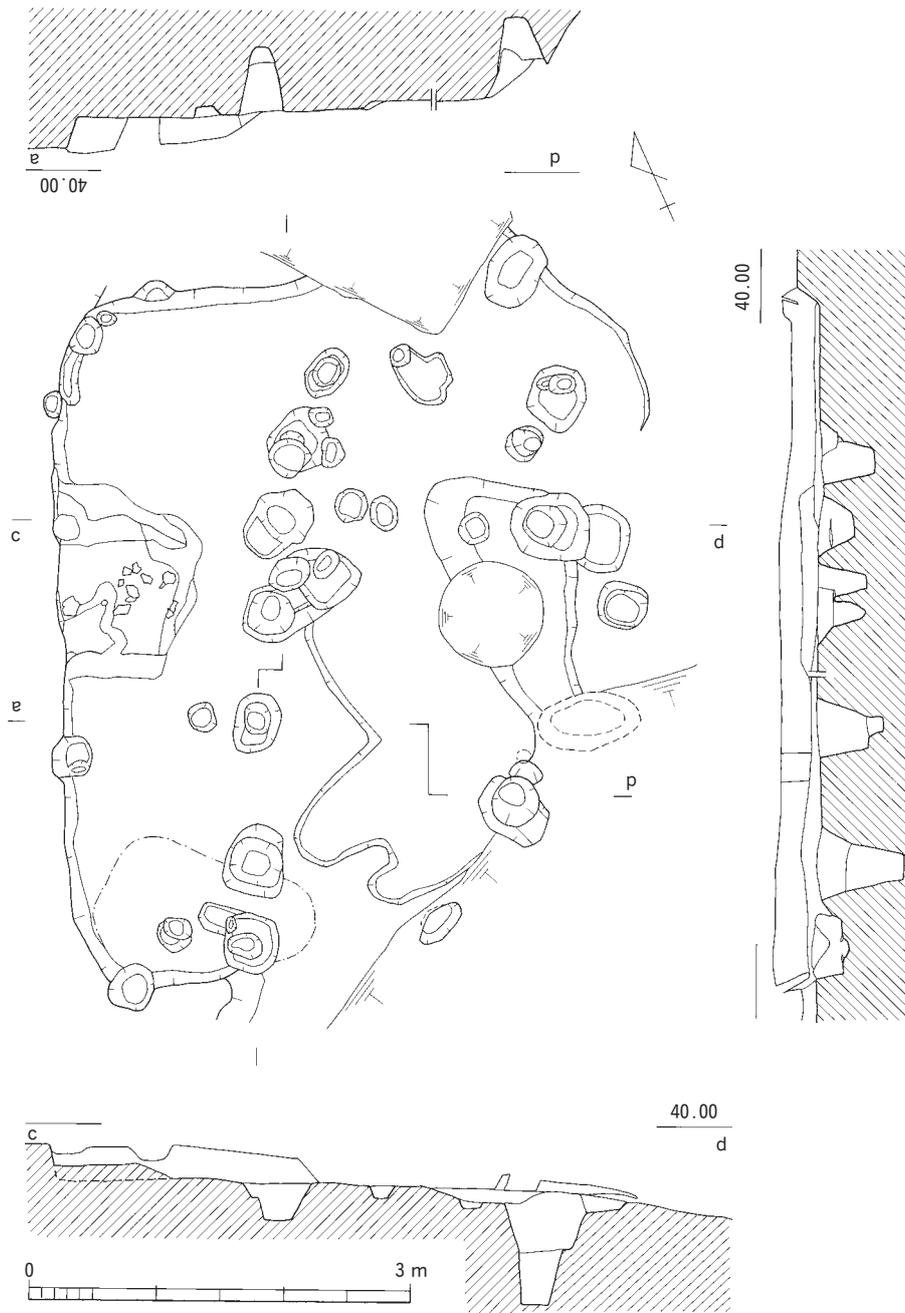
第10図 SI006実測図(縮尺 1/60)

(3) SI011 (第11図 図版5)

SI005の西隣で検出した方形プランの竪穴式住居跡である。SI005同様、西側の壁体は失われているが、残存する北東-南西の壁体は長さ548cmを測る。支柱穴は4本であるが、それぞれを線で結んでも正四角形を呈しない。不整形な四角形であるが、柱穴自体はしっかりしたものである。西側柱穴中心と西側の壁までの距離が150~180cm程あり、この距離と東側柱穴と東側壁体の距離が同じだとすると北西-南東の壁長は540cm程となり、ほぼ正方形のプランを呈すことになる。床面は東側に後世の攪乱がある。また、北隅に僅かに壁溝が残る。残存する壁高は最も良く残っているところで28cm程である。また、西側の壁体中央にカマドを設ける。

カマド (第12図 表1・2 図版5~8)

カマドの残りは悪く、基底部の灰白色粘土による構造体が残るのみである。全般的に市内の遺跡から検出される古墳時代のカマドの造りは、使用される粘土が少なく、全体に脆弱な印象を受け、近接する朝倉地方のカマドと比べると大きく異なる。本カマドも住居跡掘削段階で焼土、粘土等を検出したため、その部分を残し、袖等のカマド主要部分の検出を試みたが、明確にできなかった。このため10cm間隔で断面を観察しながら調査し、その資料を基にカマドを復元した。これから推定すると僅かに中膨らみで、幅は130cm程度、袖の残存長は北側の方が長く約100cmを測る。煙道の壁体への掘込みは残存する部分においては確認されなかった。カマド内の堆積物にはほぼ全体的に灰や焼土が混ざっ

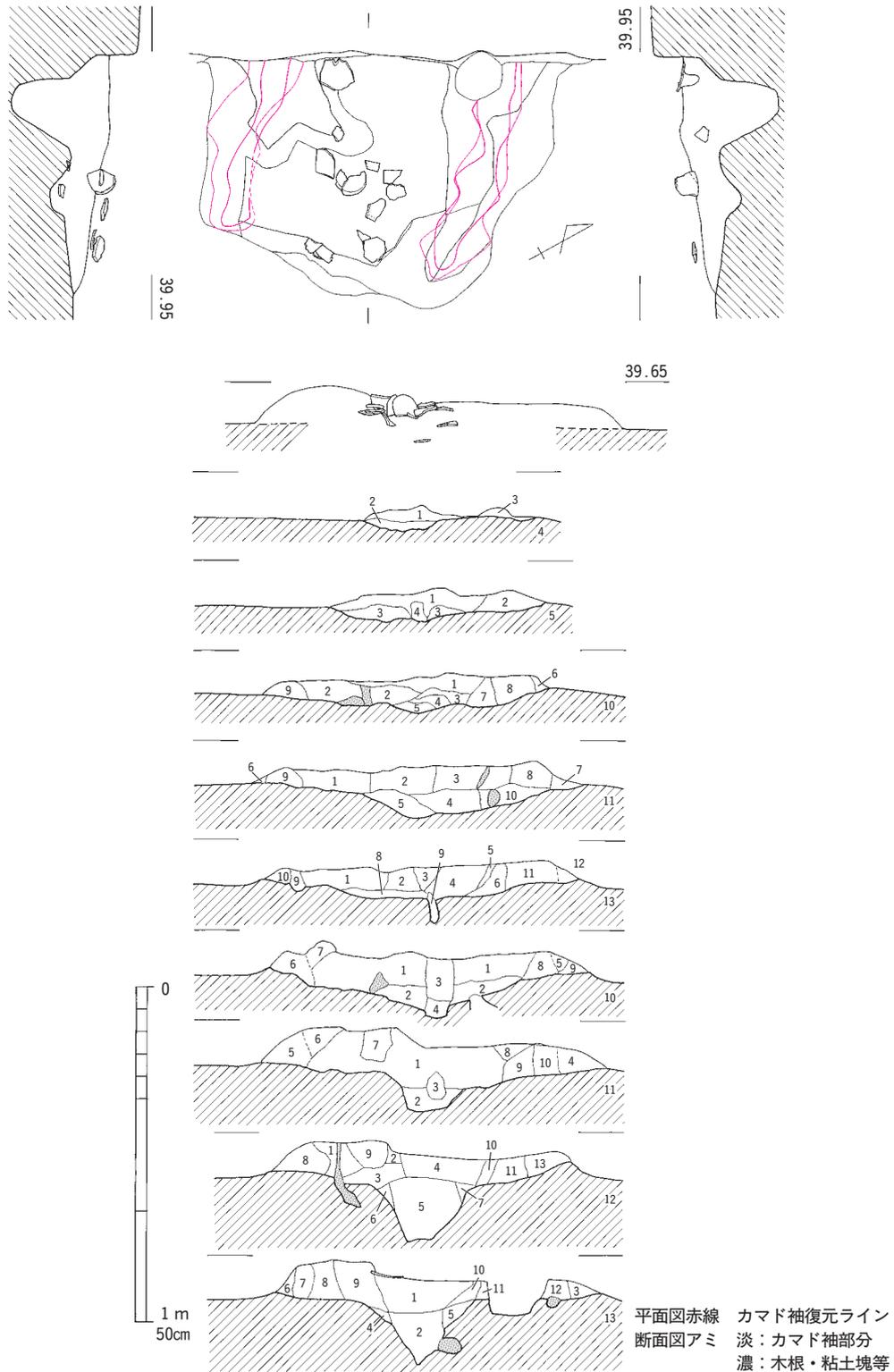


第11図 SI011実測図（縮尺 1/60）

ている。前庭部は僅かに奥に傾斜し、D断面部分が焚口と思われる。支脚は残存していないが、F断面の3・4層が柱状をしており、支脚を抜いた痕の可能性はある。その後ろのG～I断面の床面は深く掘込まれ、断面の観察からカマド崩壊後と考えられる。その埋土も後世の攪乱とは考えにくく、支脚を取り出す際に掘られたものと考えたい。

#### 出土遺物（第13～15図 図版11・12）

4・5は須恵器の坏蓋である。4は全体的には天井部から口縁部にかけての1/3程の破片であるが、口縁部の残りは1/7程度である。復元口径は12cm、器高3.3cmを測る。天井部から口縁部にかけて緩やかな丸みをもって下り、頂部と口縁部の中程の位置から上を回転ヘラ削りする。端部はやや外



第12図 SI011カマド実測図 (縮尺 1/30)

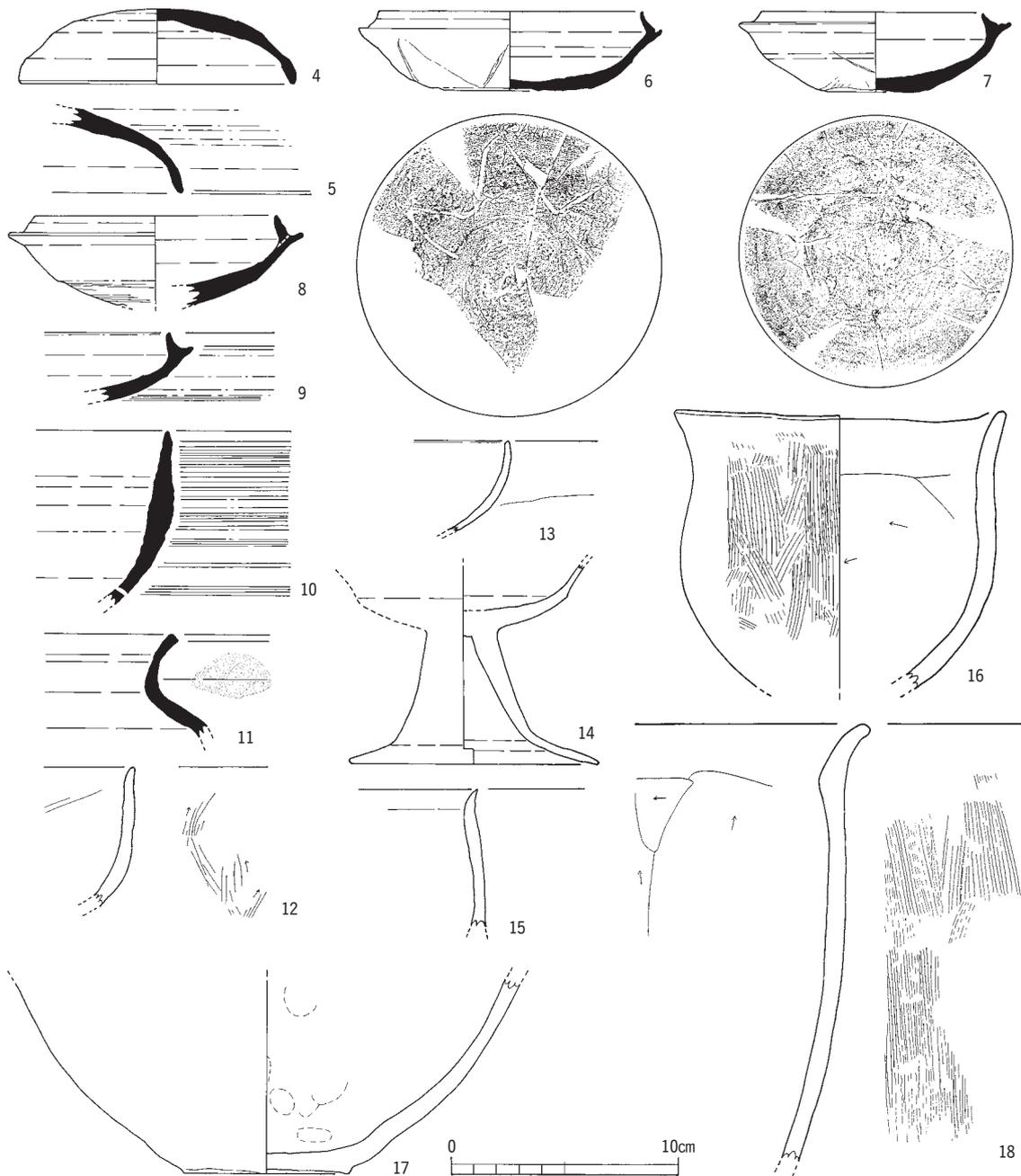
傾して立ち、端部は丸くおさまる。胎土には1～3、4mm大の砂粒が見られ、焼成は良好である。色調は内面が灰色(7.5Y6/1)～灰オリーブ色(7.5Y6/2)、外面は灰色(7.5Y5/1)を呈す。5は体部から口縁部にかけて1/7足らずの破片である。残存高は3.7cmで、口径を敢えて復元すれば12.4cmとな

A-A'	1	褐色土	7.5YR4/4	
	2	橙色土	5YR6/8	
	3	灰白色粘土	10Y8/2	
	4	浅黄色粘土	2.5Y7/4	八女ローム層 (地山)
B-B'	1	褐色土	7.5YR4/3	
	2	にぶい橙色土	2.5YR6/3	
	3	橙色土	5YR6/6	
	4	明黄褐色土	2.5Y6/6	地山の土塊
	5	浅黄色粘土	2.5Y7/4	八女ローム層 (地山)
C-C'	1	灰黄褐色土	10YR5/2	炭を1%含み、黄橙色 (10YR7/8) の2~10mm大の土塊を2%含む。橙色 (2.5YR6/8) の3mm大の土塊を2%含む。層の中央部分は色調が明るくなっておりにぶい黄橙色 (10YR1/3) となっている。土の粒子は細かい。
	2	にぶい黄褐色土	10YR6/3	全体的に灰を含む。3~5mm大の焼土塊を7%含む。土の粒子は細かく、しまりは弱い。
	3	暗灰黄色土	2.5Y4/2	全体的に灰と1%の割合で炭を含む。3~6mm大の焼土塊を10%含む。土の粒子は細かく、しまりは弱い。
	4	橙色土	5YR6/6	焼土の層で、北側ブロック部分は被熱し硬くしまり、中央部はにぶい黄褐色 (10YR4/3) となっている。灰・炭を含む。
	5	にぶい黄褐色土	10YR5/3	3mm大の焼土塊を1%、明赤褐色 (5YR5/6) の微細な土を1%含む。土の粒子は粗く、しまりは弱い。
	6	にぶい黄褐色土	10YR4/3	炭を含む。やや土の粒子は細かく、しまりもある。
	7	にぶい黄褐色土	10YR5/3	炭と灰を含む。黄橙色 (10YR7/8) の微細な土を1%含む。灰白色 (10YR8/2) の2mm大の土を1%含む。土の粒子は細かく、袖の土が崩れてきたものと思われる。しまりはやや弱い。
	8	にぶい橙色土	2.5YR6/3	灰白色 (10YR8/2) 粘土が混ざり込んでいる。粒子は細かく、よくしまっている。
	9	灰白色粘土	5Y7/2	にぶい黄褐色土 (10YR5/3) が混ざり込んでいる。土の粒子は細かく、よくしまっている。
	10	浅黄色粘土	2.5Y7/4	八女ローム層 (地山)
D-D'	1	暗褐色土	10YR3/4	炭を1%含み、3~5mm大の焼土塊を7%含む。土の粒子は細かく、しまりはやや弱い。
	2	にぶい黄褐色土	10YR4/3	2~10mm大の焼土塊を2%含むが、4mm大の焼土塊も認められる。炭も1%みられ、土の粒子は細かいが、しまりは強い。
	3	にぶい黄褐色土	10YR4/3	灰白色 (10YR8/2) の粘土塊を含む。3~8mm大の焼土塊を3%含む。土の粒子は粗く、しまりは弱い。
	4	褐色土	10YR4/4	1~3mm大の焼土塊を1%の割合で含む。土の粒子は細かくよくしまっている。
	5	にぶい黄褐色土	10YR5/4	30mm大の明赤褐色 (5YR5/8) の焼土ブロックがみられ、1~5mm大の焼土塊と炭をそれぞれ1%の割合で含む。土の粒子は粗く細かく、よくしまっている。粘性を帯びる。
	6	灰黄褐色粘土	10YR5/2	粒子は細かく、非常によくしまっている。
	7	にぶい黄褐色土	10YR5/3	1~3mm大の焼土塊と炭をそれぞれ1%の割合で含む。土の粒子はやや粗く、よくしまっている。
	8	にぶい橙色土	2.5YR6/3	灰白色 (10Y8/2) 粘土が混ざり、2mm大の焼土塊を1%の割合で含む。
	9	灰白色粘土	10Y7/2	粒子は細かく、よくしまっている。
	10	にぶい黄褐色土	10YR5/4	70mm大のにぶい黄褐色 (10YR6/2) 粘土ブロックを含む。2~3mm大の焼土塊と炭をそれぞれ1%の割合で含む。土の粒子はやや粗く、よくしまっている。粘性を帯びる。
	11	浅黄色粘土	2.5Y7/4	八女ローム層 (地山)
E-E'	1	暗褐色土	10YR3/4	15mm大の灰白色 (10Y8/8) 粘土ブロックを含む。2~8mm大の焼土塊を5%、炭を1%の割合で含む。土の粒子は粗く、しまりはやや強い。
	2	明オリブ灰色粘土	2.5GY7/1	橙色の焼土が混ざり、灰を含む。粒子は粗く、しまりは弱い。
	3	にぶい黄褐色土	10YR4/3	2~3mm大の焼土塊を1%含む。土の粒子は粗く、しまりは弱い。
	4	にぶい黄褐色土	10YR4/3	3層よりやや暗い色調を呈す。灰を含み、1~10mm大の焼土塊を3%含む。粒子は粗く、しまりは弱い。
	5	灰白色粘土	10Y8/2	粒子が細かく、よくしまっている。
	6	にぶい黄褐色土	10YR5/4	2~12mmの焼土塊を2%含む。粒子は細かく、しまりは弱い。
	7	にぶい黄褐色土	10YR4/3	粒子は細かく、よくしまっている。
	8	にぶい褐色土	7.5YR5/4	灰を含み、1~2mm大の焼土塊を1%含む。土の粒子は粗く、しまりは弱い。
	9	暗褐色土	10YR3/4	2~15mmの焼土塊を3%含む。粒子は細かく、しまりは弱い。
	10	灰白色粘土	10Y8/2	灰白色粘土に黄褐色土 (2.5Y5/4)、混ざり込んでいる。土の粒子は細かく、土の粒子は細かくよくしまっている。
	11	灰白色粘土	10Y8/2	12層が崩れ込んだ土である。灰白粘土に暗褐色 (10YR3/4) の土が混ざり込んでいる。また、1~2mm大の焼土塊を1%含む。粒子は細かくよくしまっている。
	12	灰白色粘土	10Y8/3	土の粒子は細かく、土の粒子は細かくよくしまっている。
	13	浅黄色粘土	2.5Y7/4	八女ローム層 (地山)

表1 II b区 SI011カマド土層観察表①

F-F'	1	にぶい黄褐色土	10YR4/3	1～20mm大の焼土塊7%、5cm大の粘土塊がみられる。
	2	にぶい黄褐色土	10YR5/3	2～4mm大の焼土塊を2%、炭を1%、さらに灰も含む。土の粒子はやや細かく、よくしまっている。
	3	灰黄褐色土	10YR4/2	2～17mm大の焼土塊と炭をそれぞれ1%、さらに灰も含む。土の粒子は粗く、よくしまっている。
	4	黄褐色土	2.5Y4/3	2～15mm大の焼土塊と炭をそれぞれ2%、さらに灰も含む。土の粒子は粗く、よくしまっている。
	5	にぶい黄褐色土	10YR4/3	灰を含み、土の粒子はやや細かく、しまりは強い。
	6	灰白色粘土	10YR8/2	2mm大の焼土塊を1%の割合で含む
	7	灰白色粘土	10YR8/2	6層が内側に崩れたと考えられるもので、2～5mm大の焼土塊を2%含む。
	8	灰白色粘土	10YR8/2	暗褐色(10YR3/4)土が混ざる。灰を含み、炭と1～2mm大の焼土をそれぞれ1%の割合で含む。E断面11層と同一。
	9	灰白色粘土	10YR8/2	E断面12層と同一。
	10	浅黄色粘土	2.5Y7/4	八女ローム層(地山)
G-G'	1	にぶい黄褐色土	10YR4/3	灰を含み、1～10mm大の焼土塊を3%、炭を2%含む。E、G断面の1層と同一。
	2	にぶい黄褐色土	10YR5/3	1～4mm大の焼土塊を1%含む。F断面2層と同一。
	3	灰黄褐色土	10YR4/2	灰と2cm程の地山土塊を含み、2～10mm大の焼土塊を1%含む。粒子は細かく、しまりは弱い。
	4	にぶい黄褐色土	10YR4/3	灰を含み、炭と1～2mm大の焼土塊を1%含む。粒子は細かく、よくしまっている。
	5	灰白色粘土	10YR8/2	F断面6層と同一。
	6	灰白色粘土	10YR8/2	灰を含み、1～8mm大の焼土塊を2%、2～4mmの砂粒を1%含む。5層が崩れた層と考えられる。
	7	灰白色粘土	10YR8/2	1～30mm大の焼土塊を3%、炭を1%含む。5層が崩れた層と考えられる。
	8	灰白色粘土	10YR8/2	灰を含み、3mm大の焼土塊と炭をそれぞれ1%含む。10層が崩れた層である。
	9	灰白色粘土	10YR8/2	にぶい黄褐色土(10YR4/3)が混ざり込んでいる。灰を含み、1～2mmの焼土塊を1%含む。10層が崩れた層とされる。
	10	灰白色粘土	10YR8/2	にぶい(2.5YR6/3)が混ざっている。2mm大の焼土塊と炭をそれぞれ1%含む。F断面8層と同一と考えられる。
	11	浅黄色粘土	2.5Y7/4	八女ローム層(地山)
H-H'	1	にぶい黄褐色土	10YR5/3	1～7mm大の焼土塊を2%、炭を1%、さらに灰も含む。土の粒子は細かく、よくしまっている。
	2	にぶい黄褐色土	10YR5/4	炭を1%含む。土の粒子は細かく、よくしまっている。
	3	にぶい黄褐色土	10YR5/4	灰を含み、1～10mm大の焼土塊と炭をそれぞれ1%含む。粒子は細かく、しまりはやや強い。粘質を帯びる。
	4	にぶい黄褐色土	10YR4/3	灰を含み、2～10mm大の焼土塊と炭をそれぞれ1%含む。粒子は粗く、しまりはやや強い。
	5	にぶい黄褐色土	10YR4/3	灰を含み、7～20mm大の焼土塊を3%、炭を2%含む。G断面1層と同一。
	6	にぶい黄褐色土	10YR5/3	灰を含み、土の粒子は細かく、しまりは弱い。
	7	にぶい黄褐色土	10YR5/3	灰を含み、1～5mm大の焼土塊と炭をそれぞれ1%含む。粒子は細かく、しまりはやや強い。
	8	灰白色粘土	10Y8/2	灰を含み、1～15mm大の焼土塊と炭をそれぞれ1%含む。G断面5層と同一。
	9	灰白色粘土	10Y8/2	灰を含み、1～2mm大の焼土塊と炭をそれぞれ2%含む。G断面7層と同一。
	10	にぶい黄色土	2.5Y6/3	にぶい黄色土と灰白色粘土が混ざる。灰を含み、2mm大の焼土塊を1%含む。粒子は細かく、しまりは弱い。G断面9層と同一。
	11	灰白色粘土	10Y8/2	灰を含み、1～8mmの焼土塊を1%含む。G断面10層と同一。
	12	浅黄色粘土	2.5Y7/4	八女ローム層(地山)
	13	灰白色粘土	10Y8/2	灰を含み、にぶい黄褐色(10YR4/3)土のブロックを含む。1～2mm大の焼土塊を1%含む。粒子はやや細かく、よくしまっている。
I-I	1	にぶい黄褐色土	10YR4/3	1～8mmの焼土塊を2%含む。H断面の4層と同一。
	2	にぶい黄褐色土	10YR4/3	2～10mm大の焼土塊を2%含む。H断面の5層と同一。
	3	にぶい黄褐色土	10YR4/3	灰と粘土を含み、2mm大の焼土塊を1%の割合で含む。粒子は細かく、よくしまっている。
	4	にぶい黄褐色土	10YR5/3	H断面6層と同一。
	5	にぶい黄褐色土	10YR5/3	H断面7層と同一。
	6	灰白色粘土	10Y8/2	黄褐色土(2.5Y5/3)が混ざる。炭を1%含む、粒子は細かく、よくしまっている。
	7	灰白色粘土	10Y8/2	黄褐色土(2.5Y5/3)が混ざる。2mm大の焼土塊を1%、炭を2%含む、粒子は細かく、よくしまっている。
	8	灰白色粘土	10Y8/2	灰を含み、1～10mmの焼土塊を2%、炭を1%を含む。粒子は細かく、よくしまっている。
	9	灰黄褐色	10YR5/2	灰白色粘土のブロックを含む。1～5mmの焼土塊と炭をそれぞれ1%含む。土の粒子は細かく、よくしまっている。H断面の9層と同一と考えられる。
	10	灰白色粘土	10Y8/2	H断面の10層と同一。
	11	灰白色粘土	10Y8/2	H断面の11層と同一。
	12	灰白色粘土	10Y8/2	にぶい黄色土(2.5Y6/3)が混ざる。灰を含み、1～5mm大の焼土塊を1%含む。粒子は細かく、よくしまっている。H断面13層と同一。
	13	浅黄色粘土	2.5Y7/4	八女ローム層(地山)

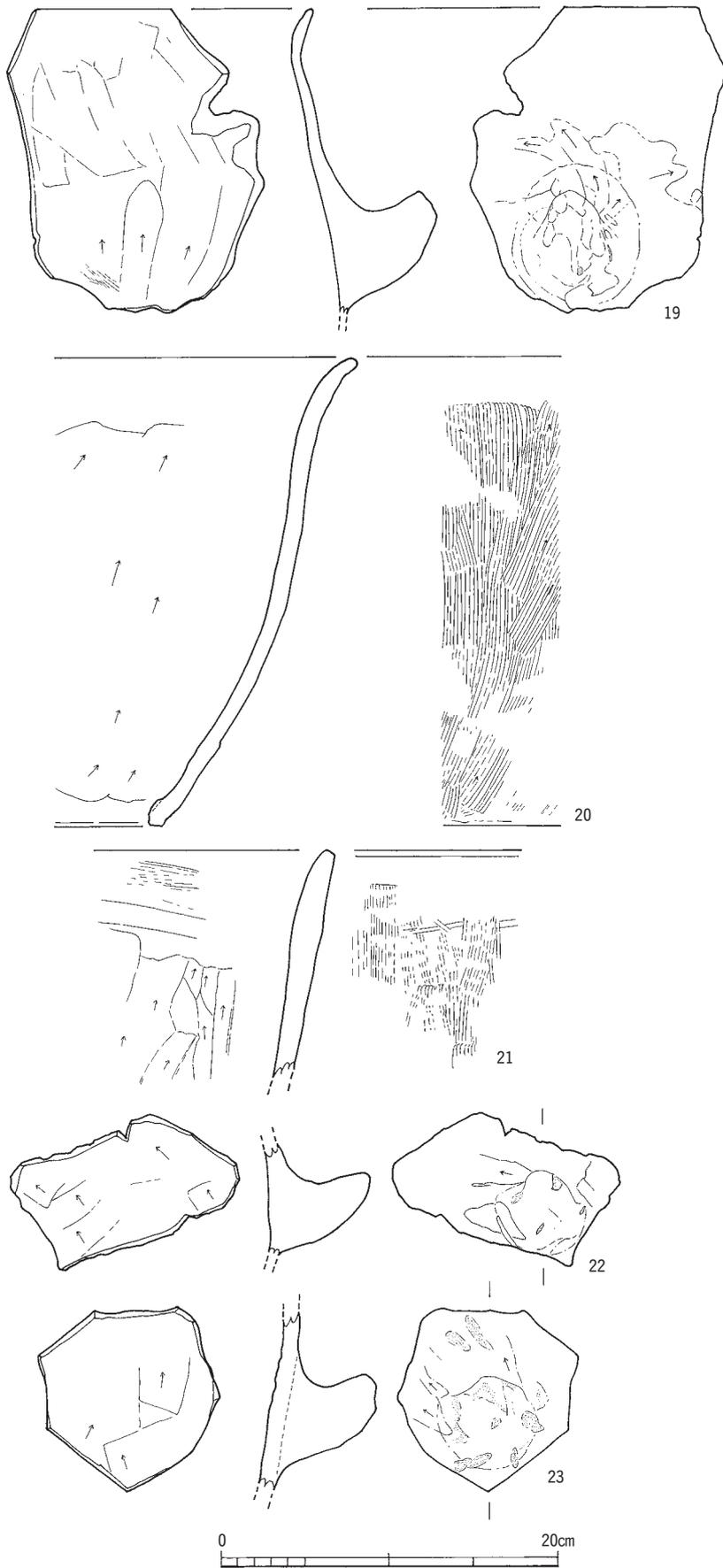
表2 II b区 SI011カマド土層観察表②



第13図 SI011出土遺物実測図① (縮尺 1/3)

る。口縁端部から2 cm余りの位置から回転へら削りが見られ、天井部はやや直線的である。端部は1と同様に外傾して立ち、端部は丸くおさまる。胎土は細砂粒が若干みられ、焼成は良好である。色調は内面が青灰色(5B6/1~5/1)、外面は灰色(N4/)を呈す。6・7は須恵器の坏身で、いずれも底部にへら記号が認められる。6は1/4足らずが残る。復元口径は11.5cm、同受部径13.2cm、器高3.5cm、立ち上り高0.9cmを測る。立ち上りは内傾し、口縁端部から1/3程の所で引き起こされる。受部は立ち上り側に段を作り、端部はやや上方に短く引き出される。体部はやや丸みを帯び、鋸歯状のへら記号を記す。底部は平坦で、回転へら削りされる。胎土は細砂粒をやや含み、焼成は良好である。色調は内外面ともに灰色(内面 N6/・外面 N7/)を呈す。7は床上から底部を下にした状態で出土

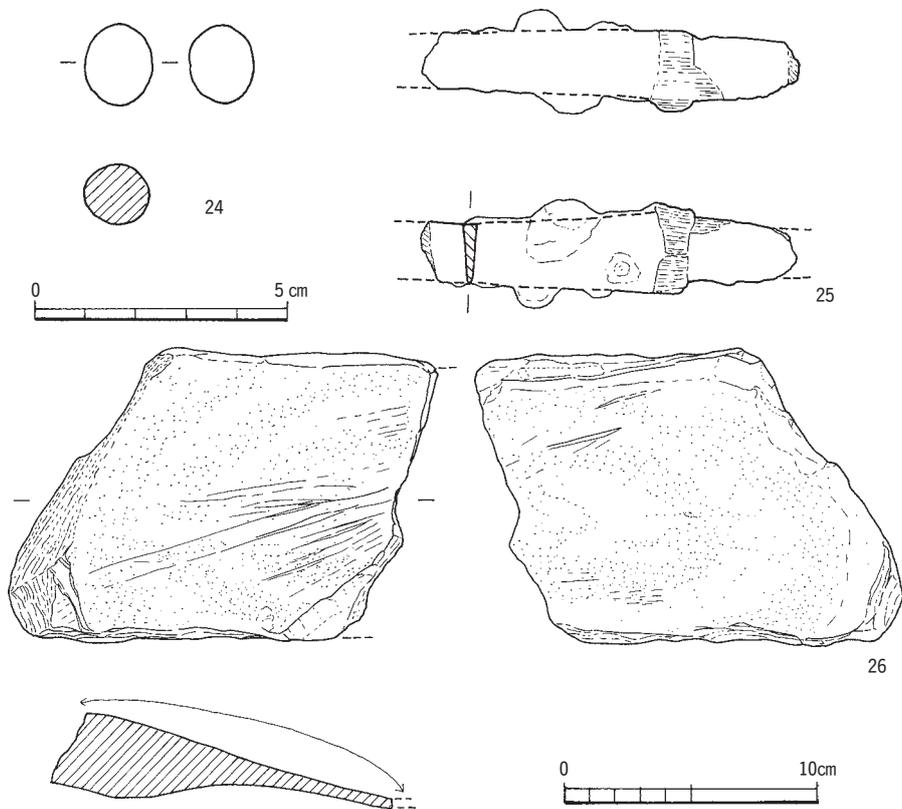
したもので、受部の所々が欠けているが、ほぼ完形である。口径9.6cm、受部径12cm、器高3.5cm、立ち上り高0.5cmを測る。立ち上りは強く内傾し、口縁端部付近は若干引き起され気味となる。受部は僅かに窪む幅1mm程の沈線が巡るが、段または凹線が形骸化したものである。端部は横方向にやや長めに引き出される。体部は全体的に緩やかな丸みを持つが、中央部でやや屈折し底部に至る。底部は井桁状に手持ちのへら削りが施され、底部中心部はやや窪む。また、体部から底部にかけて「キ」字状のへら記号が残される。胎土は細砂粒に加え3～4mm大の砂粒も見られるが、焼成は良好である。色調は内外面ともに灰色(7.5Y5/1)を呈す。8・9は須恵器の有蓋高坏の身部である。8は身部の1/4程が残る。復元口径は10.6cm、同受部径13cm、残存高4cm、立ち上り高0.9cmを測る。立ち上りは直線的にやや内傾し、器壁は基部で4mmとやや厚い。上部まであまり薄くならず、端部は丸くおさまる。受部は立ち上り側に段を作り、端部はやや上方に引き出される。体部はやや直線的で、中程からカキ目が施される。胎土は1cm大の砂粒をやや含むが、比較的良好な胎土で、焼成は堅緻である。色調は内面が黄灰色(2.5Y5/1)、外面が灰色(N4/)を呈す。9は身部上半部の1/5程の破片である。残存高3cm、立ち上り高0.7cmを測る。立ち上りは僅かに外に反りながら立ち、受部はやや上方に引き出される。受部端から1.7cm程の所からへら削りされ、さらにその2cm程内側からカキ目が施される。胎土は比較的良好なものが用いられ、焼成も良い。色調は内外面ともに灰色(内面5Y6/1、外面N6/)を呈すが、若干の違いが見られる。10は須恵器の椀の1/6程の破片である。残存高は7.7cmを測る。体部中央部の器壁はいわゆる焼成時の火膨れで、部分的に肥厚したものである。この部位から直立し口縁部に至る。外面は全体にカキ目が施され、体部中央に幅4mmの凹線が2条巡る。また、その下の2箇所1cm足らずの幅でカキ目をナデ消した痕が観察される。胎土は砂粒を微量含むが、良質なものである。焼成は堅緻で、焼成時に灰を被っているが自然釉にはなっていない。色調は内外面ともに灰白色(2.5Y1/7)を呈すが、焼きむらが生じ灰色(N4/)を呈す部分もある。11は須恵器の壺である。口縁部から肩部の1/5～1/6程の破片である。口頸部は外反した形状を呈しているが、歪んだ状態で焼成されており、本来は口頸部が直行する短頸壺と思われる。頸部から肩部との境にかけて、焼成時に灰が付着している。胎土は長石粒がやや多く見られるが、焼成は良好である。色調は内面が暗灰色(N3/)、外面が灰色(N6/)を呈す。12は土師器の椀である。体部から口縁部にかけて1/5程が残る。残存高は5cmを測る。体部は緩やかな丸みをもって直立する口縁部に至る。残りは良くないが、全体にヨコナデで仕上げられ、外面体部下位からは手持ちのへら削りが見られる。胎土は1mm大の砂粒が僅かに見られるが、良好な胎土が用いられる。焼成はややあまく、色調は内外面ともに橙色(7.5YR7/6)を呈す。13は土師器の高坏である。坏部の体部から上と脚裾端部のかなりの部分を欠失する。残存高は8.8cmを測り、脚裾径は11cmと推定される。坏部底部は緩やかな丸底を呈し、屈曲して体部へ至る。体部は僅かしか残存していないので明確ではないが、外反しながら延びるものと思われる。脚部筒部はやや開く截頭円錐形を呈し、裾部は筒部から屈曲して大きく直線的に開く。全体に磨滅しているが、筒部外面は縦方向のへら削りで整形さる。胎土は1～2mm大の砂粒を僅かに含むが、比較的良好な胎土である。焼成はややあまく、色調は内外面ともにふい黄橙色(10YR7/4)を呈す。14は土師器の小型鉢で口縁部から体部の部分の1/6足らずの破片である。残存高は6.2cmを測り、口径は6～7cm程度と思われる。丸底を呈す底部から体部は直線的に立上がり、口唇部は内傾する。外面は縦方向の刷毛目の後、口縁部をヨコナデする。内面はへら削りの痕跡が見られる。胎土は1～2



第14図 SI011出土遺物実測図② (縮尺 1/4)

mmの砂粒を含み、焼成もあまり良くない。色調は内面にふい褐色 (7.5YR5/4)、外面も内面と同様の色調を呈すが、かなり大きい黒斑が見られる。15は土師器の口縁部から体部にかけての1/5足らずの破片で、小型の壺または鉢と思われる。体部上位は真直ぐ延び、口縁部付近で浅い「S」字状を呈し、端部は尖り気味に収まる。磨滅により調整は不明瞭であるが、外面体部には刷毛目がかすかに認められる。内面体部も不明瞭であるがへら削りされているようである。口縁部は内外面ともヨコナデされる。また外面体部には被熱による赤変がみられる。胎土は微砂粒がやや見られるものの良好な胎土である。焼成は二次的に被熱しているせいもあり良好である。16は土師器の小型甕で、底部と胴部下半の一部を欠失する。口径17.6cm、胴部最大径13.9cm、残存高12.1cmを測る。口縁部は僅かに外反し、胴部の張りも弱い。底部は残存部から推定すると、比較的座りのよい丸底を呈すと思われる。調整は外面胴部には刷毛目が施されるが、口縁部から7~8cm程の位置から下はこの調整をナデ

消している。胴部内面は横方向にへら削りされ、口縁部は内外面ともヨコナデされる。胎土は1～2mm大の砂粒をやや多く含み、焼成は良好である。色調は内外面ともににぶい褐色(7.5YR5/3～5/4)を呈す。17は壺の底部と考えられる破片で、底部は完存するが、底部に続く胴部は部分的にしか残っていない。底径は6.2～8.7cmで、残存高8.7cmを測る。底部面は僅かに上り、中心部で2mmを測る。胴部下半は底部の縁に粘土を被せる様にして作っており、大きく丸みを持って上る。胎土は砂粒をやや含むが、良好な胎土で、焼成も良い。色調は内外面とも浅黄橙色(10YR8/4)を呈す。18は甑になる可能性が高い口縁部から胴部の破片である。残存高19.4cmを測る。口縁部は外反して立ち、端部は丸く収まる。胴部はあまり張りを持たず、緩やかに下る。外面器壁は磨滅しているが、胴部には縦方向の刷毛目が施される。内面胴部は大きな単位で上方に向かってへら削りが行われているが、口縁部直下に縦方向のへら削りに切られる横方向のへら削りが見られる。胎土は細かい砂粒を比較的多く含み、焼成はほぼ良好である。色調は内面が黒色(N2)、外面が橙色(5YR6/6)を呈す。19は把手付きの甕と思われる破片で、カマド部分から出土した。残存高は18.9cmを測る。胴部上半は内傾して延び、さらに彎曲して外傾する口縁部に至る。把手の貼付は把手基部から胴部器面に指で粘土を押し広げている。内面はへら削りされ、さらに、口縁下は浅い刷毛目や一部ナデにより調整される。口縁部は内外面ともヨコナデされる。胎土はやや砂粒を含み、焼成は良好である。色調は内外面ともににぶい黄橙色(内面7.5YR7/4、外面5YR6/4)を呈す。20は甑の破片で、カマド検出上部およびカマドの周りから小片の状態で出土し、接合したものである。把手部分は欠失するが、口縁部から底部まで1/6程が残る。器高は28cmを測る。口縁部は外反し、端部は丸く収まる。胴部の張りは弱く緩やかに下り、底部



第15図 SI011出土遺物実測図③(縮尺 2/3=24・25、1/3=26)

開口部分は薄く粘土をのせ整形する。外面の調整は口縁部にヨコナデを施した後、刷毛目調整を行う。内面も口縁部のヨコナデ後に胴部のへら削りを行っているが、口縁部分にはヨコナデとへら削りに切られる横方向の刷毛目が認められる。胎土は砂粒をやや多く含み、3～4mm大のものも見られる。焼成は良好で、色調は内面がにぶい褐色（7.5YR5/4）、外面が褐灰～黒褐色（10YR4/1～3/1）を呈す。21も甑になる可能性が高い口縁部の破片で、床上から出土した。口縁部は直線的で端部は角状となる。外面の調整は磨滅して不明瞭であるが、口縁部のヨコナデの後に縦方向の刷毛目調整を行っているようである。その後、さらにナデを施しているようでもあるが明らかではない。内面は21と同じように口縁部のヨコナデの後、胴部にへら削りが行われ、口唇部下2cmにヨコナデ前に施された横方向の刷毛目が認められる。胎土は砂粒を比較的多く含む。焼成は若干あまく、色調は内面が明赤褐色（2.5YR5/6）、外面がにぶい褐色（7.5YR5/4）を呈す。22・23は把手部分の破片で、23は床上からの出土である。22は把手が付く胴部の破片で、胴部は球状に近く、甕の可能性も考えられる。把手は胴部にへらで押撫でられ貼付される。23の把手が付く胴部は直線的で、甑に多く認められる形状に近い。把手の胴部への取付けは、ナデやへらで弧状に押付けるよう貼付される。胎土はいずれも砂粒を多く含むが、焼成は良好である。色調は22の内面が黄褐色（10YR5/6）、外面が橙色（5YR6/6）を呈し、23は内外面とも明赤褐色を呈す。24は玉状を呈す土製品である。穿孔は認められない。やや楕円気味で、径は1.5cm～1.2cmを計る。胎土は細砂粒のほか角閃石を僅かに含む。焼成はあまり良くなく、色調は明赤褐色を呈す。39は刀子の関部周辺の破片である。残存長7.4cmを計り、遺存状態は良くない。関部には5～6mmの金具を巻く。刃部は背幅3mmを計る断面楔形を呈す。40は砂岩製の砥石で一方を欠失する。主に上下の面を使用するが、側面部にも研磨部分が見られる。上下面の中央は縁部に比べやや窪み、斜行する削痕が線状に走る。

## 2. 土壙

### (1) SK002 (第16図 図版9)

調査区の北側で検出した。約225×125cmを測る略長方形のプランを呈す。壁体は北東面がやや傾斜が浅いが、その外は垂直に近い角度で落ちる。床面までの深さは70～80cm程を測るが、床面も長軸両端から中央に向かって傾斜し、さらに中央部にはピットが穿たれる。

#### 出土遺物

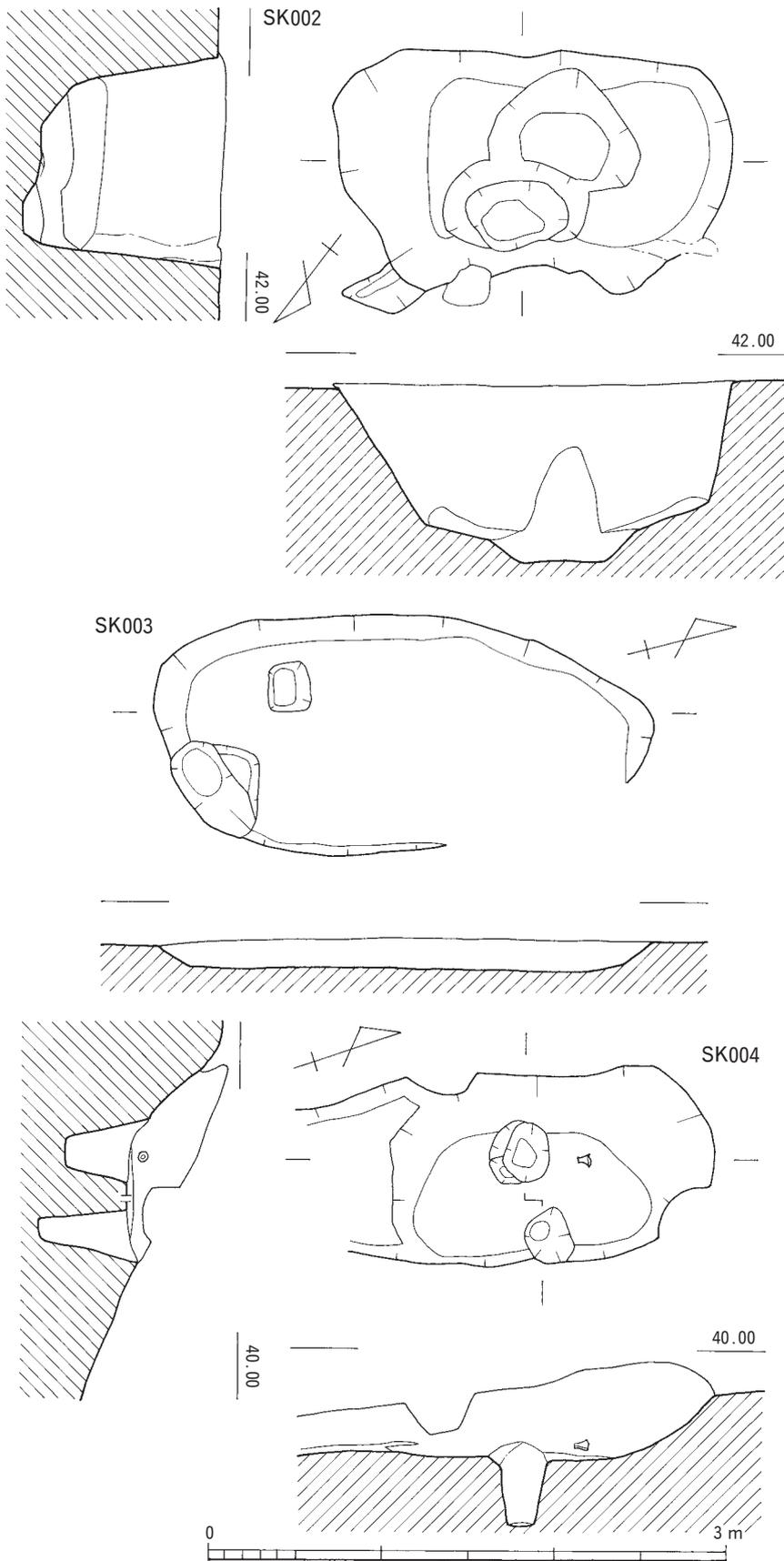
弥生土器、須恵器、土師器の破片が出土したが、土師器片が大半を占める。

### (2) SK003 (第16図 図版9)

SD001の南西端で検出した。遺存状態は悪く、断面観察でのSD001との関係は明確にし得なかったが、遺構検出時の平面プラン確認段階では切り合いは認められず、溝の床面との深さや配置状況から、連続する遺構と推測される。290～140cmの長楕円形プランを呈し、床面までの深さは最も良く残っている部分で17～18cm程度である。床面は地山へのシミが著しく、全体に汚れた感じである。

#### 出土遺物 (第17図 図版12・13)

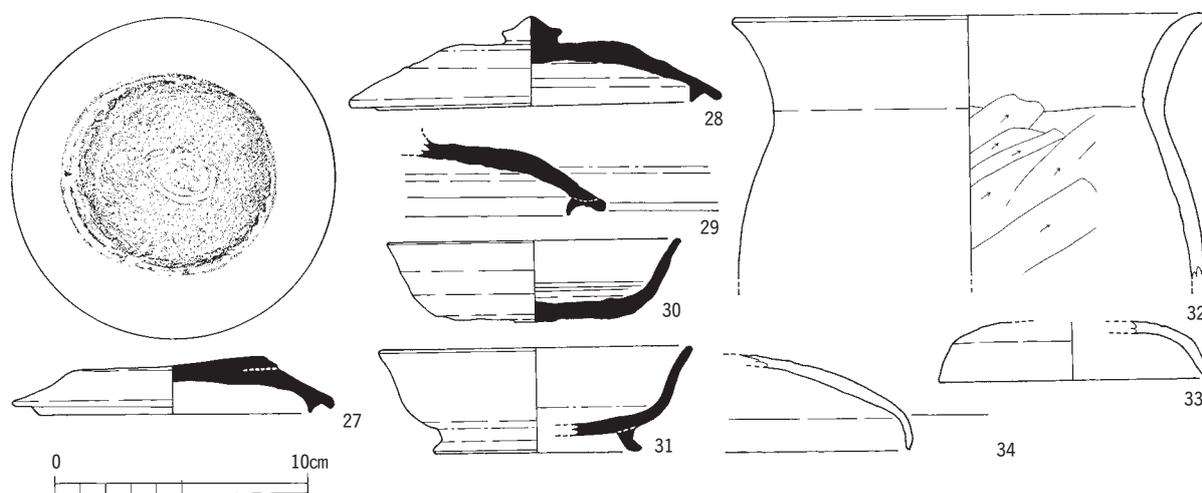
27～29は須恵器の坏蓋である。27は口縁部が2箇所欠けているが、それ以外は完存している。器高



第16図 SK002~004実測図 (縮尺 1/40)

は天井部が傾斜しているため1.8~2.3cmを測り、口径は12.6cmである。天井部には撮みはなく、へらにより切り離されたままの状態、刷毛目調整により平坦に仕上げられている。また天井中央部に「0」字状のへら記号と思われる線描きが残る。体部は僅かに反り気味に開き、端部は丸く収まる。内面にはかえりを有し、内面天井部はナデで仕上げられる。胎土はやや砂粒が多く、焼成は良好である。色調は内外面ともに灰色(7.5Y5/1)を呈す。28も口縁部が1箇所欠損しているが、ほぼ完形である。器高は3.7cm、口径14.6cmを測る。天井部は回転へら削りを施し、中央に疑宝珠形の撮みを貼付する。体部は直線的に開き、端部は丸く収まる。内面にはかえりを有す。胎土は比較的砂粒が少なく長石粒を僅かに含む程度であるが、焼成はあまく、軟質である。このため磨滅が著しく、詳細な調整の観察は難しい。色調は内外面と

もに灰色 (7.5Y4/1) を呈すが、にぶい赤褐色 (2.5YR5/4) を呈する部分がともに見られる。29は天井部から口縁部にかけての1/7程の破片である。天井部には撮みが貼付された痕が認められ、これから推定すると口径は15.8cm程と思われる。残存高は3.2cmを測る。天井部は右回りの回転ヘラ削りが行われ、体部は緩やかに開いて、丸く収まる口縁端部に至る。内面にはかえりを有す。胎土は長石粒をやや含み、焼成は堅緻である。色調は内面が暗灰色 (2.5YR2/5)、外面が灰色 (10Y1/5) を呈す。30・31は須恵器の坏身である。30は一部口縁部を残す1/3程度が残存する。器高は3.2~3.3cmを測り、口径は11.6cm、底径は6.8cm程と推定される。丁寧にヘラ切り離された平坦な底部から、直線的に外傾する体部へ緩やかに移り、そのまま口縁部へ至る。胎土は長石粒を僅かに含み、焼成は良好である。色調は内外面とも灰色 (N6/ ~5/) を呈す。31は口縁部から底部にかけての1/3足らずの破片である。口径は12cmと推定され、器高は4.2cmを測る。口縁部は僅かに外反し、体部は緩やかに内傾して下る。体部と底部との境はあまく、この境から約6mm内側に高台が貼付される。高台はやや外傾して取付けられ、中程からさらに外方に引き出される。胎土は細かい長石粒をやや含むが、全体的に良好な胎土で、焼成も堅密である。色調は内外面ともに青灰色 (5B5/1) を呈す。32は土師器の甕で、口縁部から胴部上位部分の1/3程の破片である。口径は18.6cm、頸部径15.4cmと推定され、残存高は1.5cmを測る。口縁部は外反して立ち、胴部の張りは強くない。外面は被熱し、器面が荒れ、煤も付着するため調整等は明瞭ではないが、頸部から胴部にかけて縦方向の細かい刷毛目が観察される。内面は頸部以下に斜め方向のヘラ削りが行われる。胎土には3~4mm大の砂粒が見られるが、全体的に量は多くない。一方、細かい金雲母が胎土に多く混ざる。焼成は良好である。色調は内面がにぶい赤褐色 (5YR4/3)、外面は被熱もあって暗褐色 (5YR3/2)~黒褐色 (5YR2/2) を呈する。33と34は土師器の蓋としたが、坏としてもよい。33は口縁部を中心に一部天井部まで1/3程の破片で、口径は10.6cmと推定され、残存高2.35cmを測る。体部は短く外傾して立ち、天井部と体部の境は明瞭である。調整は細かい破片の接合資料であり、器面の磨滅も著しいため明らかではない。胎土には砂粒はほとんど見られないが、焼成はあまく、軟質である。色調は内外面とも橙色 (5YR6/6) を呈す。34は口縁部から天井部の一部にかけての1/6足らずの破片である。緩やかな天井部から短く内彎気味に立つ体部に至



第17図 SK003出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

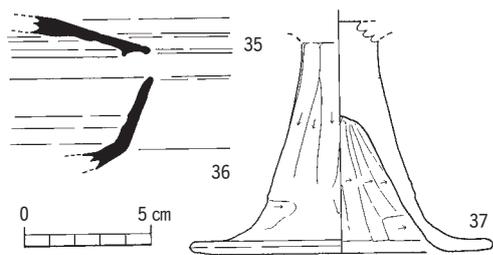
り、口縁部は僅かに肥厚する。調整は磨滅のため不明である。胎土には僅かに砂粒を含む。焼成はあまく、軟質である。色調は内外面ともににぶい橙色（7.5YR4/7）を呈す。

### (3) SK004 (第16図 図版10)

調査区の南側で検出した。一部は調査区外に延びる。南側に段を持ち、北側が床面となっている。深さは最も残りが良いところで約55cmを測り、壁体は椀状に落ちる。床面は平坦で、148×70cmの不整楕円形プランを呈す。中央部の2個のピットはこの土壌を切るものである。

#### 出土遺物 (第18図 図版13)

35は須恵器の坏蓋で、口縁部から体部にかけての小破片である。へら削りされた天井部が僅かに残り、体部から口縁部にかけては直線的で、端部は丸く収まる。内面にはかえりを有す。胎土には長石の細粒を僅かに含むが、良質なものである。焼成は堅緻である。色調は内外面とも灰黄褐色(10YR5/2)を呈す。36は須恵器の口縁部から底部端までの坏身部小片で、高坏になるかもしれない。体部から口縁部にかけて直線的に外傾して立ち、体部と底部の境は明瞭である。僅かに残る底部端部分にはへら削りは認められない。胎土は砂粒をほとんど含まず、焼成は良好である。色調は内外面ともに灰色(内



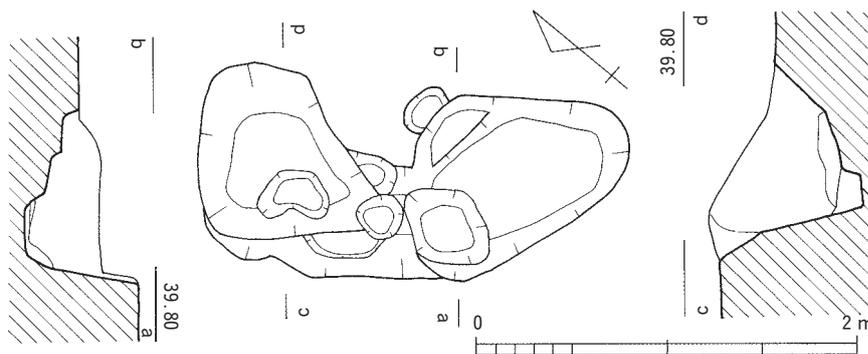
第18図 SK004出土遺物実測図 (縮尺 1/3)

面5Y6/1 外面7.5Y6/1)を呈す。37は土師器の高坏脚部である。脚裾部の2/3を欠失する。筒部は裁頭円錐形を呈し裾部は真横に引き出される。筒部外面は縦方向に丁寧にへら削りされ、裾部はヨコナデされる。筒部内面にはしぼり痕が残る。胎土は砂粒が少なく、焼成はややあまく、軟質である。色調は内外面とも橙色（2.5Y6/6）を呈す。

## 3. 不明遺構

### (1) SX013 (第19図)

SI005とSI011の間で検出した。当初は検出プランが直線的であったことから、これらの住居跡に切られた竪穴式住居跡と考えたが、明確な床面が検出されず、不正形な土壌やピットが集まった形状を呈した。



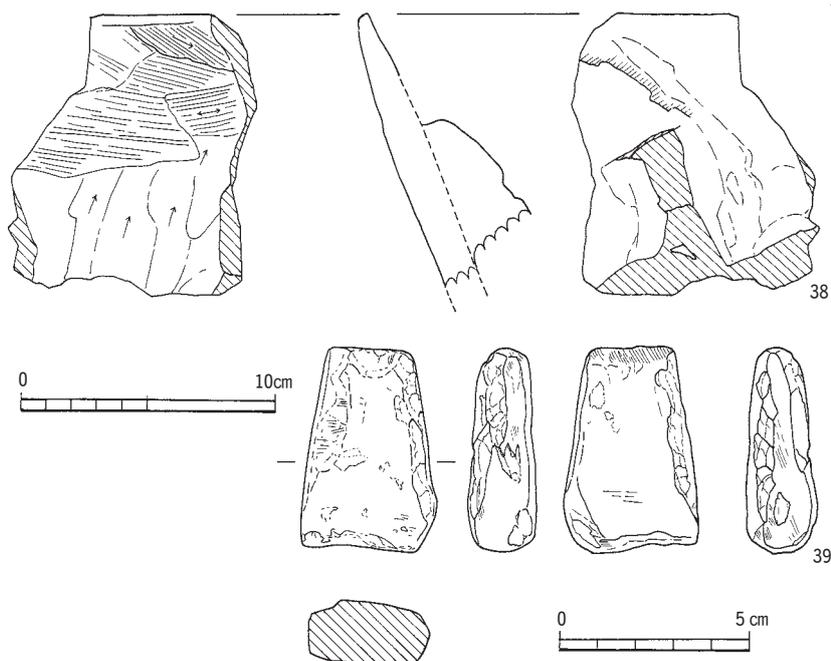
第19図 SX013実測図 (縮尺 1/40)

#### 出土遺物

#### (第20図 図版13)

須恵器、土師器の破片が若干出土したにとどまる。須恵器の坏蓋

となるものには口縁部内面にかえりを有す。38は移動式カマドの受け口部分と考えられる。焼き口周りの帯は貼付部から取れている。また、その外側にも何らかの貼付があったような粘土の貼付が観察される。内面は粗い縦方向のヘラケズリの後、受け部下を横方向に刷毛状の工具でヘラケズリ状に調整する。色調は内面が明褐色(2.5YR5/6)、外面が橙色(7.5YR6/6)を呈す。39は滑



第20図 SX013出土遺物実測図(縮尺 1/3=38、1/2=39)

石製品で、扁平な台形状を呈し、高さ5.4cm、上辺幅2cm、下辺幅3cm、最大厚1.8cm、重さ53.8gを測る。全ての面を磨き、形を整えているが、穿孔はみられず、自立しない。大宰府跡等で出土している滑石製品では、権状製品以外にこのような形状を有すものが見られない。この事から権状製品の未製品と考えられる。

## (2) SX014 (図版10)

西側調査区界で検出したため、調査区を拡張した。不整形な緩い弧を呈すプランで、黒色の埋土のしまりは強くなく、風倒木痕とも考えたが、層序等から明確にすることはできなかった。床はシミ状になり、しっかりしたものではない。

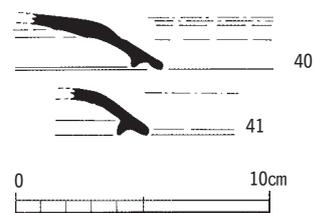
## 4. 溝

### (1) SK001 (第18図 図版10)

主軸をN-44-Eにとり、7m直線的に延びた後、南東側に75°折れ曲がり、SI005を切る。反対側はSK003に続くものと思われる。溝は逆台形を呈し、深さは検出面と最も比高差がある所でも14cm程である。

### 出土遺物 (第21図)

40は須恵器坏蓋の破片で、口縁部から天井部部分までの1/4程の破片である。残存高2.2cmを測り、口径は12.2cm程度になると思われる。天井部は左回りの回転ヘラ削

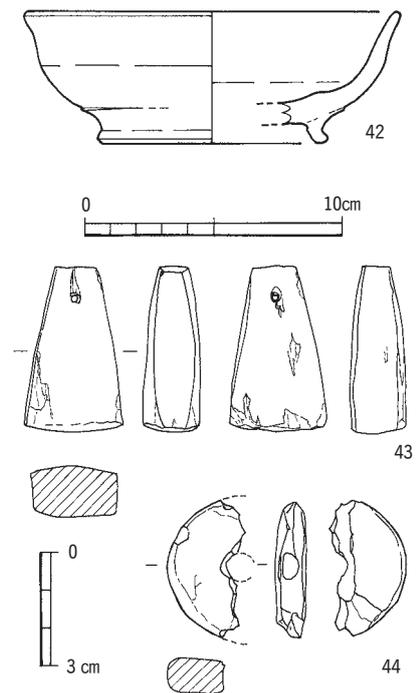


第21図 SD001出土遺物実測図(縮尺 1/3)

りが施され、体部から口縁部まで僅かに反るように外傾して下る。口縁端部は丸く収まり、内面にはかえりを有す。胎土は微砂粒の外、長石粒をやや含む。焼成は良くなく、もろい。色調は内外面とも灰白色（内面5Y1/7 外面5Y2/7）を呈す。41も須恵器の坏蓋で、体部から口縁部にかけての小片である。残存高は2.9cmを測る。体部は緩やかな弧を呈し、口縁部は僅かに外側に開く。口縁端部は丸く収まり、内面にはかえりを有す。胎土には砂粒がほとんど見られず、焼成も堅密である。色調は内面が灰色（N4/）、外面が暗灰色（N3/）を呈す。

## 5. ピット出土の遺物（第22図 図版13）

42・43はP97の埋土中から同一レベルで出土した。42は土師器の椀で、1/2足らずが遺存する。口径は14.6cm、高台径9cmと推定され、器高は5.15cmを測る。口縁部は外反し、体部中央に成形段階のあまい稜線が巡る。高台は低く、やや外傾して貼付される。全体に状態が悪く、器面が荒れ、調整はまったく観察できない。胎土には砂粒を比較的多く含み、長石粒が目立つ。色調は内外面ともに橙色（5YR6/6）を呈す。43は滑石製の榿状製品である。偏平な台形状を呈し、高さ4.3cm、上辺幅1.1cm、下辺幅2.6cm、最大厚1.5cm、重さ26.2gを測る。頂部から8mm程の位置に、約1.5mmの穴が穿たれる。全体に丁寧な作りで、1次製品か、2次製品かは分からないが、台形状のそれぞれの面が、一方は平坦、若しくは中軸部がごく僅かに窪んだ形状を呈するのに対し、もう一方の面はやや張りが強い。このことから滑石製石鍋の胴部分を利用した2次製品の可能性も考えられる。44はP44から出土した滑石製の紡錘車である。1/2余りを欠失する。厚みは0.8cmを測り、直径は3.9cm、孔部分の径は0.7cm程度と思われる。



第22図 ピット出土遺物  
（縮尺 1/3=42、1/2=43・44）

## Ⅳ まとめ

### A. Ⅱa区について

本調査地の北側は、ほとんど出土遺物もなかったため時期については明確にし得ない。平行して走る SK002と SK003は平成2年度に実施した北側隣接地の発掘調査（以下「1次調査」という。）で、これに続く溝が検出されている。SK004も1次調査の方向に延びているが、この溝は検出されていない。また、1次調査では土壙も調査区の西側に多く、この傾向は今回の調査と同様である。

### B. Ⅱb区について

#### 1. 竪穴式住居跡について

SI005、006、011の3軒を検出したがSI005と011の間にある遺構については当初住居跡と判断し、SI005がもう少し小規模になるものと考えた。しかし、調査が進むに当たって、SI005が当初考えていた規模より大きくなることが判明、間の部分にはSX013のような遺構が検出されるに及んで、住居跡として判断しなかった。

3棟の竪穴式住居跡のうち最も残りがいいのはSI011である。方形プランを呈す、支柱穴4本の住居跡である。規模は南北方向が約5.5mで、東西方向は前述したように5.4m程度になる可能性がある。カマドは筑紫野市周辺で多く見られる形態で、壁体への煙道の掘り込みが見られず、全体に粘土の使用量が少ない。出土した須恵器坏のうち床上から出土した坏身7は法量が小さく、立ち上りも短く内傾し、受け部が横方向にやや長めに引き出されること、埋土中から出土した坏蓋4は法量や天井部から体部、口縁部にかけて緩やかな丸みをもって移行し、端部は丸く収まる点から小田富士雄氏の須恵器編年（以下「小田編年」という。）IV期でも後出的な傾向を示している。しかし、7は廃棄後の出土状態で確定的ではないが、正立して出土した坏身で、その外の図示した坏類は、この2点に比べ法量がやや大きく、坏身は立ち上りが長い。このことから小田編年IV a期に上ると思われる。このように、図示した坏類はIV期の形状を示しているが、表2に示すように、若干ではあるが、天井部に撮みを有したり、口縁部にかえりをもつ坏蓋の破片もみられる。これらの資料は埋没段階での混入物の可能性もあるが、カマド部分から1点この形式の遺物が出土している点から無視はできない。中島恒次郎氏の消費地における須恵器を中心とした形式の出現頻度、食器変換モデルに照らしてみると、坏蓋の出現傾向は中島氏のいう画期II-1に相当する。<sup>註1</sup>また、遺物8・9のような有蓋高坏も存在するが、遺物7のような手持ちのヘラケズリの存在を考えると、ほぼ、この時期を廃絶時期と考えてよさそうである。

SI005は略南北方向約4.5mを測る方形プランの住居跡である。支柱穴の数は明確にできなかった。このためSI011で試みたような推定もできない。出土遺物は埋土から出土したものばかりで、いずれも小片である。このためこの遺構の時期については明確にはできないが、小片で図示しなかったものに

も須恵器坏蓋にかえりがあるものや坏身に立ち上りがあるものがあり、明確な時期を特定でない。また東側に接して検出された SI006は遺存状態が極めて悪く、方形プランの住居跡である以外は不明であるが、埋土から出土した遺物の内須恵器坏蓋は小片 1 点であるが口縁内面にかえりを有していた。

## 2. その他の遺構について

土壌の中で最も出土遺物が多かったのは SK003である。遺構自体の残りは良くなかったが、床上から時期が特定できる遺物が出土した。須恵器坏蓋28、29、坏身31は小田編年VI期と考えられる特徴を呈し、27、30は法量的にも小さく、坏蓋27の天井部や口縁部内側のかえりの形状、坏身30も31に比べ浅いことから一段階上ると考えられる。この土壌に続くと思われる溝 SD001からの出土遺物は多くないが、須恵器坏蓋の破片は SK003のものとはほぼ同時期の特徴を示す。SK004はいずれも埋土からの出土である。須恵器坏蓋35は小田編年VI期の特徴を示す口縁部である。

## 3. P97出土遺物について

土師器碗42は胎土が粗く、あまり深くない碗で、体部中程に原形である丸底坏の底部と体部の境が残る。やや製作段階での粗雑化が認められるが、口縁部は外反を意識し、高台は比較的丁寧な作りで径も大きい。このことから中島恒次郎氏分類のⅢ-2類に相当し、大宰府編年のⅧ~Ⅹ期に当てられるが、全体としてその中でも後出的なものと考えられる。この碗と一緒に出土した権状製品は吉村靖徳氏分類のⅡ a-2類に相当すると考えられる。<sup>註3</sup>重量は26.2gと権状製品の中では最も軽い部類に属すが、<sup>註4</sup>1両を正倉院に遺る重量銘のある分析結果の41.0~43.5gとすると64~60%となり、<sup>註5</sup>定量的な重さを示していない。しかし SX013出土の39は53.8gを測り42の205%で、穿孔前の未製品であるとした場合、この遺跡において権衡器としての何らかの基準があったのかもしれない。

### 註

註1 中島恒次郎 1997 「七世紀の食器—九州消費地—」 古代の土器研究—律令的土器様式の西・東 5  
7世紀の土器 古代の土器研究会

註2 中島恒次郎 1992 「大宰府における碗形態の変遷」 中近世土器の基礎研究

註3 吉村靖徳 1995 「権衡に関する一考察—福岡県内出土権状製品の検討と課題—」 九州歴史資料館研究論集20

註4 大野城市教育委員会 2004 「牛頸野添遺跡群Ⅰ~第2・3次調査」 大野城市文化財調査報告書第62集  
Ⅲまとめ 2 権状製品について

註5 松嶋順正 1989 「正倉院宝物より見た奈良時代の度量衡」 『正倉院よもやま話』 学生者

番号	種別	器種	点数	備考			
S	1	土師器	中	14			
			小	26			
	2	土師器	須恵器	中		1	平坦でカキ目あり。
			土師器	中		15	
	3	土師器	甕	中		1	口縁部（外反する口縁部、胴部ヘラケズリ）
				小		1	
		須恵器	坏蓋	中		2	疑宝珠撮、口縁部内面かえり。
				小		4	
			坏身	小		1	受け部横に引出し、立ち上がり高1cm。
				中		3	
			坏(部)	中		3	
				小		3	
		不明		中		1	
				小		1	
	4	土師器	椀	中		1	外反する口縁部
				甕		中	
			不明	中		14	
				小		130	
		土塊		中		3	
				小		130	
		5	須恵器	坏蓋		中	
	小					1	口縁部内面かえり無し
			坏身	小		2	受け部あり
				甕		中	2
	不明			中		3	
				小		9	2点軟質
	土師器		甕	中		6	胴部3点、底部3点（いずれも丸底）
				不明		中	37
				小		228	
				黒曜石		中	1
	6	須恵器	坏身	小		1	受け部有り
				土師器		甕	中
			不明	中		1	
	小			1			
	7	土師器	不明	中		3	中小遺物の内、3点に外面に平行タタキ、1点に刷毛目が見られる。いずれも5～8mmの器壁で、内面ヘラケズリ。瓶の破片か。
				小		14	
	8-10	須恵器	坏蓋	中		3	1点は撮が取れた痕有り。1点は口縁内面にかえり有り。
				小		3	口縁内面にかえり有り。
			高坏	中		1	脚部
				甕		大	1
			甕	中		2	胴部（タタキ：平行+カキ目/青海波）
				平瓶？		中	1
		不明		中		1	
				小		3	
		土師器	不明	大		5	甕と思われる。
中				80			
			小	362			
			鉄さい	小	1		
11	須恵器	坏蓋	中	2	カマド部分/口縁部内面かえり有り、無し、各1点		
			瓶	大	1	カマド部分/ ) 部分。カキ目有り。	
		不明	中	1	カマド部分		
			小	9	カマド部分		
	土師器	不明	中	2	カマド部分		
			小	30	カマド部分		
13	須恵器	坏蓋	小	1	口縁部内面かえり有り。		
			坏	中	1	蓋か身か不明。	
		不明	小	1	蓋か身か不明。		
			大	2			
			中	12			
			小	49			
	土師器	不明	中	4	床上		
			小	4	床上		
P	5	土師器	不明	小	5		
	6	須恵器	甕？	小	1		
				土師器	不明	小	1
11	土師器	不明	中	1	内外面に細かい刷毛目。暗褐色胎土。外面煤付着。		

※ SI011はS11とS8、9、10の一部が含まれる。

表3 遺構出土遺物一覧表①

※挿図に掲載した遺物は除く。

凡例（点数の規格）小：概ね3cm角以下、中：概ね3～8cm角、大：概ね8cm角以上

番号	種別	器種	点数	備考	
21	土師器	甕	中	1	口縁部と胴部の境付近
		不明	中	2	1点は胴部と平底の底部の境付近
23	土師器	不明	小	2	
24	土師器	甕	中	1	外反する口縁部。外面調整不明。内面胴部ヘラケズリ。
		不明	中	2	
			小	13	
25	須恵器	不明	小	3	磨減が著しい。
	土師器	把手	中	1	磨減が著しい。
		不明	小	2	磨減が著しい。
27	土師器	不明	小	3	
28	土師器	甕	中	1	磨減が著しい。
		不明	小	2	磨減が著しい。
31	須恵器	甕	中	1	カキ目(タタキが十分観察できない)/青海波
	土師器	不明	小	4	磨減が著しい細片。
32	土師器	不明	小	1	磨減が著しい細片。
33	土師器	不明	小	2	
35	土師器	不明	小	1	
36	土師器	不明	中	1	丸底の底部に近い部分か。
37	不明	不明	小	1	粗い投弾状製品の半欠。胎土・重量・調整から投弾とは異なる。手づくね状。
38	土師器	不明	小	6	
39	須恵器	不明	小	1	立ち上がりが無い坏身の口縁部か。
40	須恵器	甕	中	1	カキ目/青海波
	土師器	不明	小	22	
41	須恵器	不明	小	1	
	土師器	甕	中	1	
		不明	小	1	
46	土師器	不明	小	4	
49	須恵器	不明	小	1	口縁内面にかえりが無い坏蓋口縁か。
	土師器	不明	小	3	
50	須恵器	坏身	小	1	口縁部から体部にかけての破片。IV期的な特徴。
		不明	小	1	坏身か蓋の回転ヘラケズリ部分。ヘラ記号の一部が残る。
	土師器	高坏	中	1	坏部接合部
		不明	小	8	
54	土師器	不明	小	4	磨減細片
	石器	剥片	中	1	サヌカイト
56	土師器	不明	小	2	磨減
57	土師器	不明	中	1	磨減
			小	5	磨減
60	須恵器	甕?	小	1	外面タタキ不明瞭/青海波。小甕か外の小型器種
	土師器	坏蓋	中	1	口縁内面にかえりが無い坏蓋口縁から体部の破片
		不明	小	5	1点は外面平行タタキに縦方向の刷毛目が残る。
73	須恵器	不明	小	1	
	土師器	不明	小	1	
77	須恵器	坏蓋	中	1	口縁部内面にかえり有り。
		坏身	中	1	立ち上がりが無い坏身の口縁部
	土師器	不明	小	1	
80	土師器	不明	中	1	
82	須恵器	坏蓋	小	2	口縁部内面にかえりが無いもの。体部のカーブが強い。
	土師器	不明	小	1	
	石	不明	中	1	径7cm前後、厚み1~1.4cmの花崗岩円礫半欠品。全体に磨減し、何らかの使用が推測される。
83	須恵器	不明	中	1	瓶の破片か。
	土師器	不明	中	2	
			小	1	
84	石	不明	中	1	径2.5cm、長さ6cmのフットボール形。叩き痕等は観察されない。
90	土師器	不明	中	1	脚部。彎曲少ない。
			小	4	
92	土師器	甕	中	1	口縁下胴部。外面刷毛目、内面ケズリ。
95	須恵器	坏蓋	中	1	口縁内面にかえりが無い口縁部
	土師器	不明	小	1	
	土塊	不明	小	1	
96	土師器	不明	小	3	磨減細片
	鉄さい		小	1	
97	土師器	不明	中	4	
			小	7	
98	土師器	不明	中	1	
			小	6	磨減細片
99	土師器	不明	小	5	磨減細片

表4 遺構出土遺物一覧表②

※挿図に掲載した遺物は除く。

凡例(点数の規格) 小:概ね3cm角以下、中:概ね3~8cm角、大:概ね8cm角以上

# 圖 版



竹敷遺跡 遠景



竹敷遺跡 II a 区 全景（上空から）



竹敷遺跡 II b 区 全景（上空から）



II a 区 SD005断面 (a-b)



II a 区 SD005断面 (c-d)

図版 4



Ⅱb区 SI005 (東から)



Ⅱb区 SI006 (東から)



Ⅱb区 SI011 (東から)



Ⅱb区 SI011 カマド (東から)



Ⅱ b 区 SI011 カマド  
(a-a')



Ⅱ b 区 SI011 カマド  
(b-b')



Ⅱ b 区 SI011 カマド  
(c-c')

Ⅱ b 区 SI011 カマド  
(d-d')



Ⅱ b 区 SI011 カマド  
(e-e')



Ⅱ b 区 SI011 カマド  
(f-f')





Ⅱb区 SI011 カマド  
(g-g')



Ⅱb区 SI011 カマド  
(壁付近縦断)



Ⅱb区 SI011 遺物  
No. 7 出土状況



Ⅱb区 SK002 (東から)



Ⅱb区 SK003 断面 (西から)



Ⅱb区 SK004 (西から)



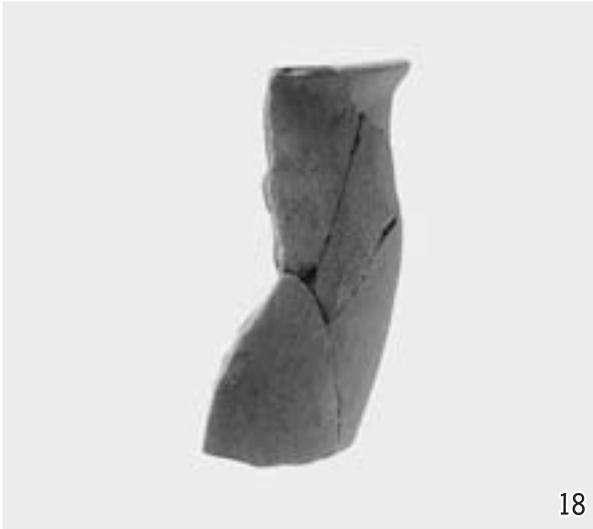
Ⅱb区 SX014 (東から)



Ⅱb区 SD001 (東から)



※写真番号は挿図番号と同じ





※写真番号は挿図番号と同じ

# 報告書抄録

フリガナ	タケシキイセキ							
書名	竹敷遺跡							
副書名	第2次発掘調査							
巻次								
シリーズ名	筑紫野市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第85集							
編集者名	奥村俊久							
編集機関	筑紫野市教育委員会（文化財課文化財担当）							
所在地	〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1丁目1-1 TEL 092 (923) 1111(代)							
発行年月日	平成17年9月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積 (m <sup>2</sup> )	調査 原因
		市町村	遺跡 番号	° ' "	° ' "			
たけしきいせき 竹敷遺跡	ふくおかけん 福岡県 ちくしのし 筑紫野市 ながおか 永岡	402176	210044	33° 28' 21"	130° 32' 20"	010109 ∫ 010330	704	小規模 住宅地 区改良 事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
竹敷遺跡		古墳時代 平安時代	竪穴式住居跡 土壇		須恵器 土師器 権状製品			

# 竹 敷 遺 跡

## 第 2 次 発 掘 調 査

筑紫野市文化財調査報告書

第 85 集

平成17年 9 月 1 日

発 行 筑 紫 野 市 教 育 委 員 会  
〒818-8686 福岡県筑紫野市二日市西1丁目1-1  
T E L 092-923-1111(代)  
F A X 092-923-9644  
URL <http://city.chikushino.fukuoka.jp>

印 刷 大 同 印 刷 株 式 会 社  
〒849-0902 佐賀市久保泉町大字上和泉1848-20  
T E L 0952-71-8520(代)  
F A X 0952-71-8528  
URL <http://www.daidou-jp.com>